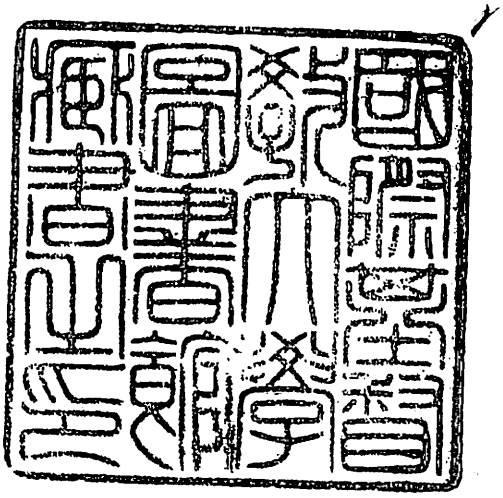
近松全集

第十一卷

1989



編纂　近松全集刊行会

故　祐田善雄
秋本鈴史
井口　洋
内山美樹子
大橋正叔
信多純一
土田　衞
鳥越文蔵
長友千代治
丸西美千男
安田富貴子
山根為雄
横山　正

紙屋治兵衛
きいの国や小はる
心中天の網島

作者 近松門左衛門

歌さん上ばつからふんごろのつころちよつころふんごろで。まてとつころわつからゆつくる〳〵〳〵たが。笠をわんがらんがらす。下そらがくんぐる〳〵も。れんげれんげればつからふんごろ。よねがなさけの。そこふかき。是かや恋の大海を。かへもほされぬしゞみ川。思ひ〳〵の思ひ歌。心が心とゞむるは門あんどうのもじがせき。うかれぞめきのあだ上るり。やくしや物まね納屋は

文字・門司関　浄瑠璃　役者　端　情　底　換　干　蜆　行　灯

歌二かいざしきのしやみせんに。ひかれて立寄きやくも有もん日

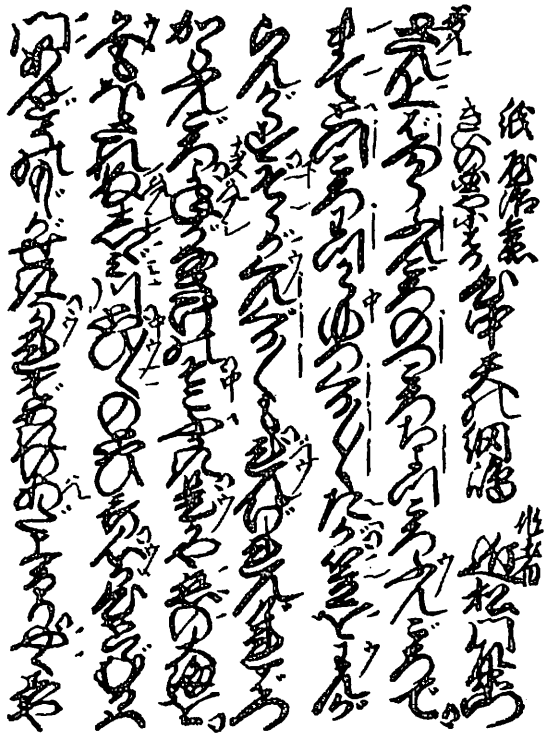
階　座敷　三　味線　弾・引　客　紋

のがれて顔かくし。しすごしせじと忍び風中ゐのきよが是を見て。

逃　隠　仕過　居　中

身をのがれが来りける。づきんのしころを取はづし〳〵。二三度

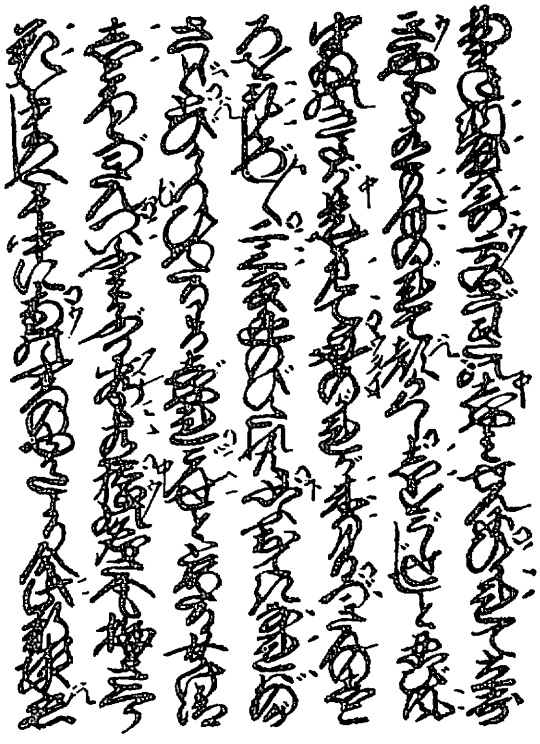
①・三保谷　逃　着　頭巾　錣　外



（1オ）

① 身をのがれが――「みをのやが」

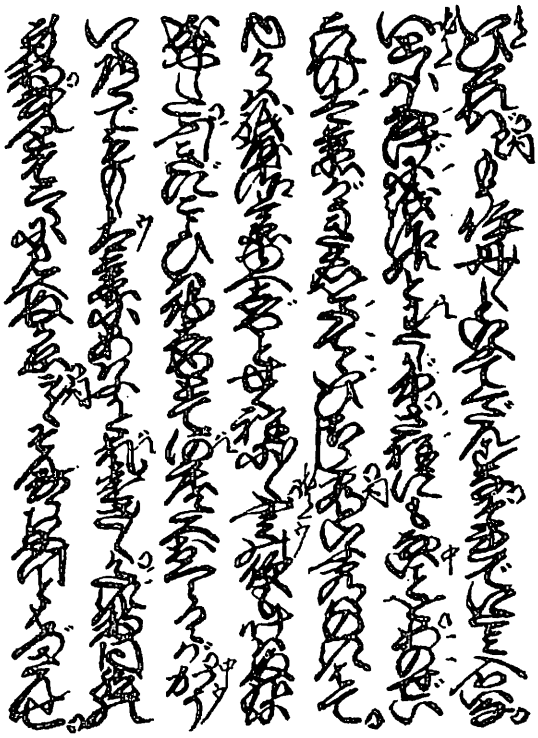
逃のびたれ共。思ふおてきなればのがさじと。とびかゝりひつたりわるじやれ。ごんせととめたる女かけ清しころとづきん。つい
（下）（敵）（逃）（悪）（洒落）（止）（景）（綴）（地）（頭巾）
ふみかぶる客も有。
（踏）
橋の名さへも梅さくら花をそろへし其中に。南のふろのゆかたよ
（中ウ）（桜）（風呂）（浴衣）
り今此新地に恋衣。きの国屋の小はるとは。此十月にあだし名を。
（1ウ）蓑・紀伊　（中）（ウ）
世にのこせとのしるしかや。
（ウ）（残）
こよひはたれか。よぶこ鳥。おぼつかなくもあんどのかげ行ちか
（ハルフシ）（今宵）（中）（呼・喚子）（ウ）（行）（灯）（違）
ふよねの立帰り。小はる様かなんといの。たがいに一座も打た
（妓）（色）（詞）（ヤ）（絶）
へ。貴面ならねば便も聞ず気色がわるいか。顔もほそりやつれさ
（地中ウ）（窶）
んした。誰やらが咄できけば紙治様ゆへ。内からたんと客のぎん
（詞）（聞）（吟）
みにあはんして。どこへもむさとはおくらぬの。いや太兵衛様に
（味）（合）（地ハル）（送）（ウ）
請出され。ざいしよとやら伊丹とやらへいかんす筈共聞及ぶ。ど
（在）（所）（行）



（1ウ）

（2オ）

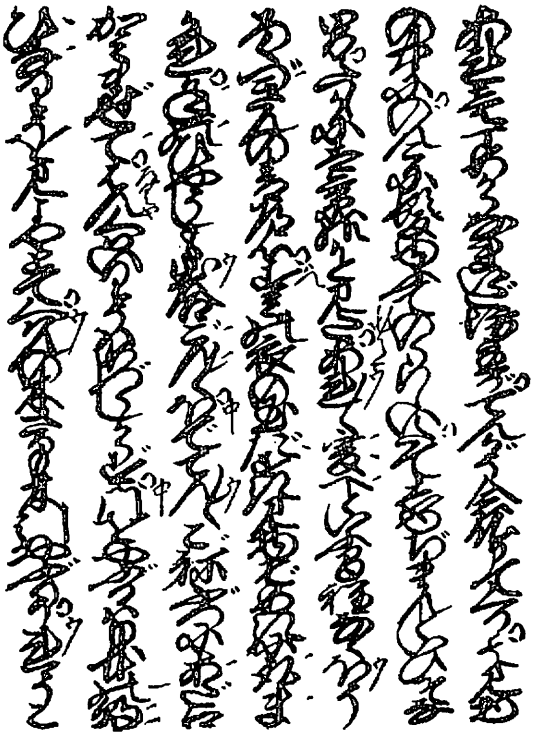
ふでござりやすといひければ。（詞）ア、もう伊丹〳〵といふてくだんすな。それでいたみ入はいな。（色）（2オ）（伊丹・痛）いとしほなげに紙治様とわたしが（地色）（ハル）中。さ程にもないことを。あのぜいこきの太兵衛がうき名をたてゝいひちらし。（中）（仲）（浮）客といふ客はのきはて。（詞）（言）内からは紙屋治兵衛ゆへ（退）じやとせく程に〳〵。（地色ウ）ふみの便も叶はぬ様に成やした。（文）ふしぎにこよひは侍しゆとて河庄かたへおくらるゝが。（今宵）②（衆）（ハル）（方）（送）（中ウ）かういく道でもも（行）し太兵衛にあはふかと気遣さ〳〵。（ウ）③（会）（ハル）かたき持同然の身持。（敵）なんとそこらに見へぬかゑ。（詞）ヲヽ〳〵そんならちやつとはづさんせ。（外）（2ウ）あれ壱丁めからなまいだ坊主が。（目）てんがう念仏申てくる。④其見物の中に。のんこに髪ゆふてのららしい。（結）たてしゆぢまんといひそな男。（伊達衆）（自慢）たしかに太兵衛様かと見た。（地色ウ）あれ〳〵爰へといふ間程なくほう（ウ）（炮）うろくづきんの青道心。（頭巾）（烙）すみの衣の玉だすき見物ぞめきに取まか（墨）（ハル）（裸）（巻）



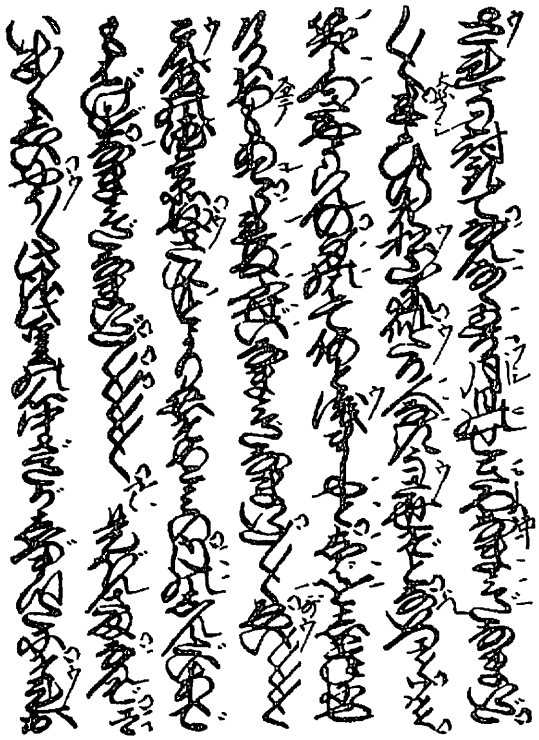
（2ウ）

① むさとは――「むさと」
② 侍しゆ――「さふらひ衆」
③ 太兵衛に――「太兵衛めに」
④ 念仏――「ねぶつ」

れ。かねのひやうしも出合ごん〳〵。ほでてん〳〵ごねぶつにあ
鉦拍子　中　念仏
だ口かみまぜて。はんくはいりうはめづらしからず。門をやぶる
道具や　樊噌流　中
は日本の朝ひなりうを見よやとて。くはんの木さかも木引やぶり。
比奈流　貫　逆茂破
うれうこされうこ討取て。なんなく過る月日のせきや。なまみだ
右竜虎(3オ)左竜虎　関　中　南無阿弥陀
なまいだ。〳〵〳〵。まよひ行共松山に。似たる人なきうき世ぞ
南無阿弥陀　文弥フシ　変
と。ないつェ、〳〵。ワハ〳〵〳〵。笑うつきやうらんの。身のはて
泣　狂乱　果
何と浅ましやと。しばをしとねにふしけるはめもあて。られぬふ
芝褥臥　目　風
ぜいなまみだなまいた。〳〵〳〵。歌ウ。ゑい〳〵〳〵〳〵〳〵こん屋
情　南無阿弥陀　紺
の徳兵衛。ふさにもとより恋そめこみの。内のしんだいあくでも
濃初染込　身代灰汁
はげず。なまみだなまいだ。〳〵。〳〵。〳〵〳〵〳〵。ア、是
剝
ぼんさま。なんぞ。ェ、いま〳〵しい。やう〳〵此比此里の心中
坊
ざたがしづまつたに。それおいて国せんやの道行念仏がしよもう
沙汰鎮　措(3ウ)　性爺　所望



(3オ)

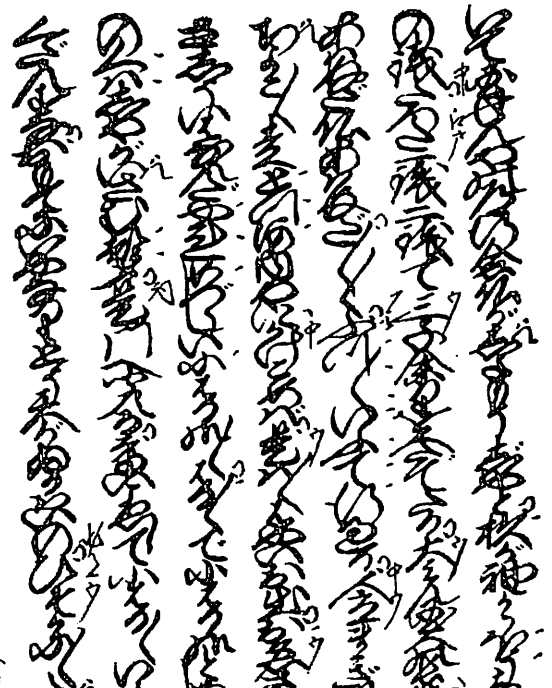


(3ウ)

じやと。杉が袖からほうしやの銭。たつた一銭二銭て三千余里を（中江戸 報謝）へだてたる。大みん国への長旅は。あはぬだ仏あはぬだ。〳〵（明 合）〳〵。ぶつ〳〵いふて行過る。（仏）

人立まぎれにちよこ〳〵走とつ河内やにかけこめば。是は〳〵は（中 屋 早）やいお出。お名さへひさしういはなんだやれめづらしい小はる様（久 言 珍）〳〵。はる〳〵で小はる様とあるしのくはしやがいさむ声。是門（遥 主 花車 詞）へ聞える。高いこゑして小はる〳〵いふてくだんすな。おもてに（声 言 表）いやなりとう天がゐるはいの。ひそかに〳〵たのみやすと。いふ（李蹈 地色 頓 中）」（4オ）

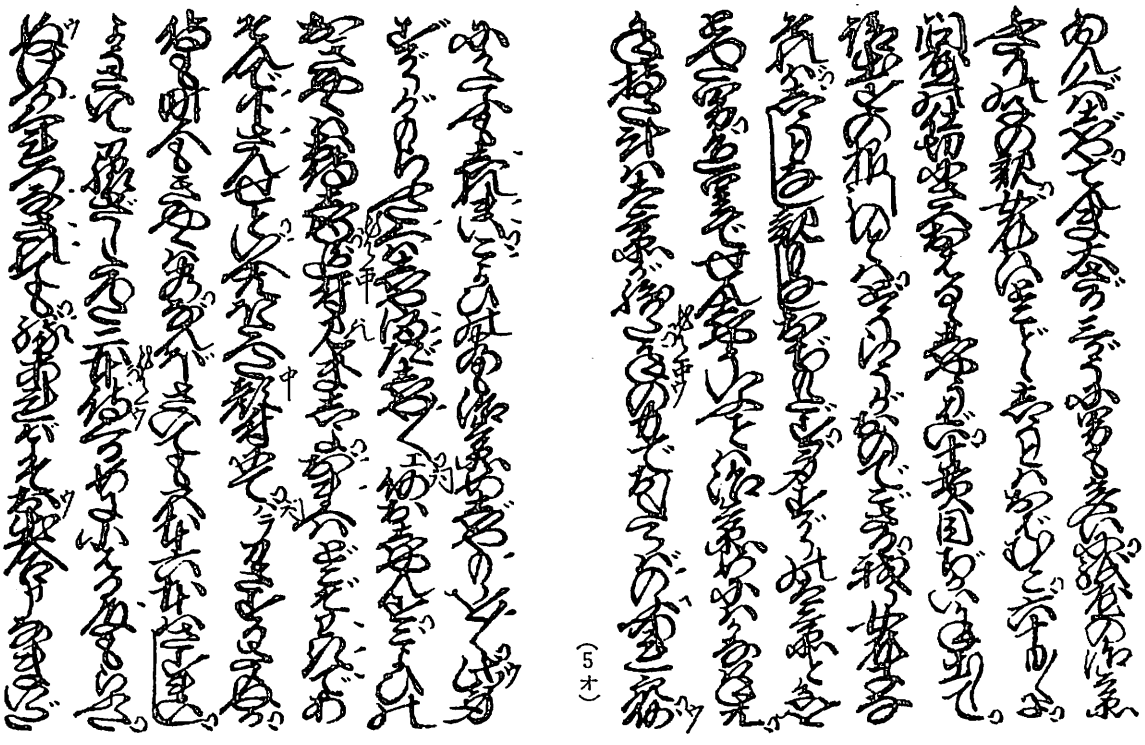
ももれてやぬつと入たる三人つれ。小はるどのりとう天とは。な（漏 連 詞 殿 李蹈）い名を付て下された。先礼からいひましよ。つれしゆ。内々咄た（言 連衆）心中よしいきかたよし床よしの小はる殿。やがて此男が女房に持（行方）か。紙屋治兵衛が請出すか。はり合の女郎近付に。成ておきやと（張 地）



（4オ）

（4ウ）

のさばりよればェイ聞共ない。（ハル）（中）（寄）（詞）（知）忍しれぬ人のあだ名を立。手がら
にならばせいだしていはんせ。（精）（出）（言）（地ウ）此小はるは聞共ないとついとのけ（退）（ウ）
ばまたすりより。（擦）（寄）（詞）聞共なく共小ばんのひゞきできかせてみせう。（判）（響）（聞）
貴様もよいゐんぐはじや。（4ウ）「因（天）（果）てんま大ざか三がうに男も多いに。（満）（坂）（郷）紙
屋の治兵衛ふたりの子の親。（二人）女房はいとこどししうとはおばむこ。（同士）（舅）（叔母）（婿）
六十日〳〵に。問屋の仕切にさへおはるゝしやうばい。（追）（商）（売）十貫目ぢ
かいかね出して。請出すの根引のとは。（銀）とらうがおのでござる。（嬉）（蜘）（斧）
我ら女房子なければ。（舅）しうとなし親もなしおぢもたず。（持）身すがら
の太兵衛と名をとつた男。（僧）色里でせんしやういふことは治兵衛め（上）
にはかなはね共。（敵）かね持た計は太兵衛が勝た。（銀）（地色中ウ）かねの力でおした（銀）
らばのふつれ衆。（連）何にかたふもしれまい。（5オ）「勝（ウ）（今宵）こよひの客も治兵衛め
じやもらを〳〵。（貰）此身ずがらがもらふたくはしや酒だしや〳〵。（ウ）（貰）（花）（車）（出）



（5オ）

（5ウ）

詞エ何おしやんす。こよひのおきやくはお侍しゆ。地色中追付見えましよ。おまへはどこぞわきであそんで下さんせと。いへ共ほたへた顔付にて。詞③ハラ刀さすかさゝぬか。侍も町人もきやくは客。なんぼさいても五本六本はさすまいし。ようさいて刀脇ざしたつた二本。地色侍くるめに小はる殿もらふた。ぬけつかくれつなされても。縁あればこそお出合申なまいだ坊主のおかげ。詞ア、念仏のくりきありがたい。地中こちも念仏申そ。ヤ。かねの火入きせるしもくおもしろい。ちやん〳〵。ちやゝんちやん。歌ゑい〳〵〳〵〳〵〳〵。紙屋の治兵衛。小はるくるひが杉はらかみで。中一ぶこはんしちり〳〵かみで。内のしんだいすきやれ紙の。はなもかまれぬ紙くず治兵衛。エなまみだ仏なまいだ。なまみた仏なまいた〳〵〳〵と。地あばれわめく門の口。人めを忍ふ夜るのあみ笠。

（6オ）

① あだ名を立――「あだ名たて」
② 身ずがら――「身すがら」
③ ハラ――「ハテ」
④ ヤ。――「ヤ」（句点）
⑤ こはんし――「こばんし」

詞ハア、ちり紙わせた。ハテきつい忍ひ様。なぜはいらぬちり紙。入塵

太兵衛が念仏こわくば。地色中なむあみ笠ももらふたと。引ずり入たる（6オ）阿弥・編貰

すがたを見れば。大小くすんだ武士の正じん。中あみ笠こしにぐつ姿真編越

とねめたる。まん丸めだまはたゝきかね。念共仏共出ばこそ。ハ睨目玉叩鉦

ア、といへ共中ひるまぬ顔。詞なふ小はる殿。こちは町人刀さいたこ言差

とはなけれど。おれが所にたくさんな新銀のひかりには。少々の光

刀もねぢゆがめふと思ふ物。ちり紙屋めがうるしこし程なうすも漆漉薄元

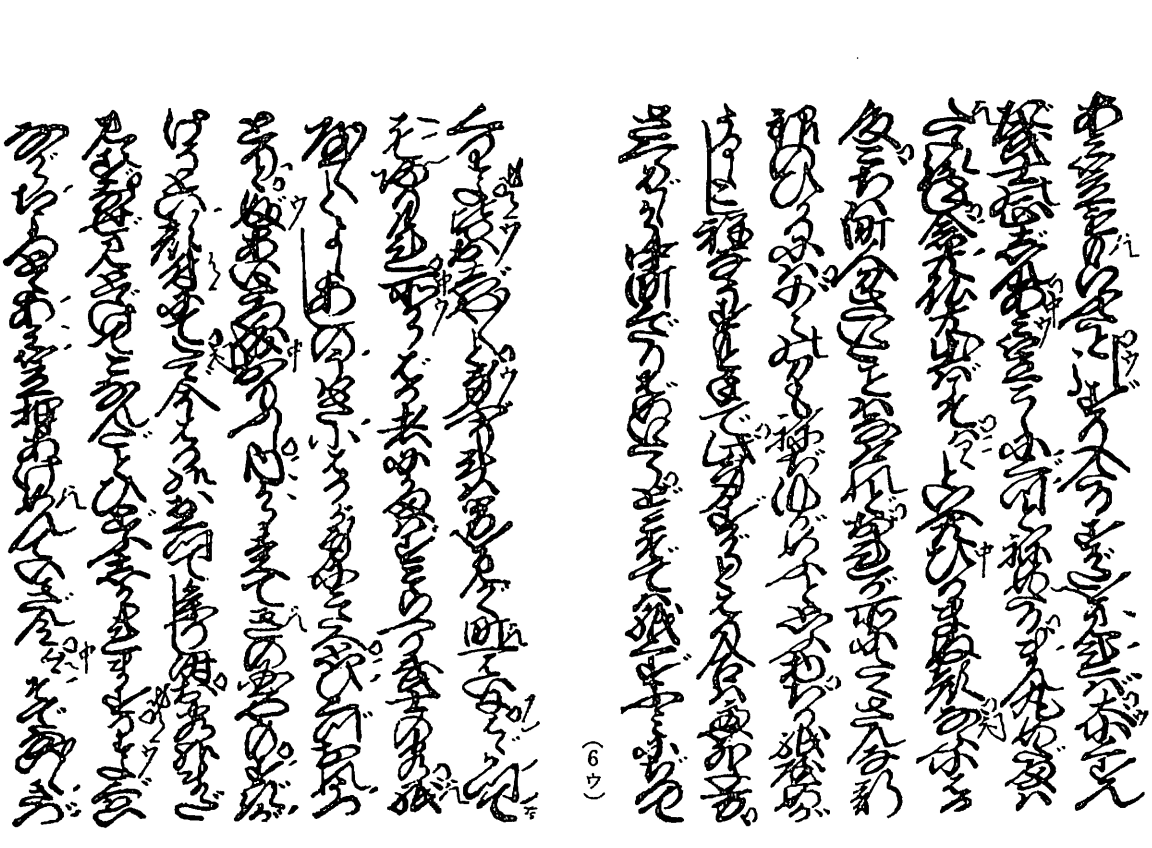
と手で。此身ずがらとはり合は慮外千万。さくらばしから中町く桜橋

だりぞめいたら。どこぞては紙くずふみにぢつてくりよ。地色ウ皆おじ踏

や〳〵と。身ぶり計は男をみがく町一はいに。はゞかつてこそ帰振杯

りけれ。

所中からばか者にかまはずこらへる武士の客。紙屋〳〵とよしあし柄堪善悪

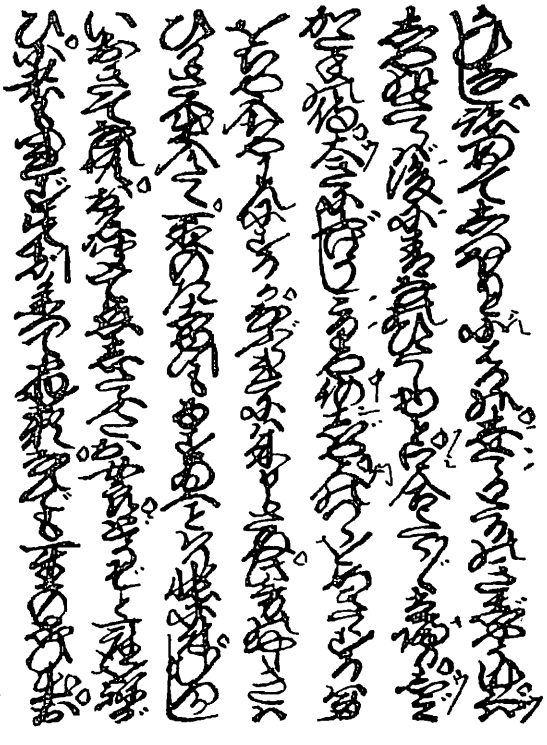


（6ウ）

（7オ）

のうはさ小はるが身にこたへ。思ひくづおれうつとりと。ぶあい（無挨）さつ成（中）おりふし。内から走てきの国やの。すぎがけうとい顔付（色）にて。たゞ今はる様おくつて参りし時。お客様まだ見えず。なぜ見とゞけてこなんだとひどふしかられます。（詞）（叱）りよぐはいながらちよつと〻あみ笠押あけめんていぎんみ。（地色ウ）（慮外）（上）（編）（面）（体）（吟）（味）ム、そでない〳〵きづかひなし。跡つめてしつほりと小はる様。（中）（ハル）（気遣）（7オ）したゝるたるのきじやうゆ。（②滴）（樽）（生醤）（油）

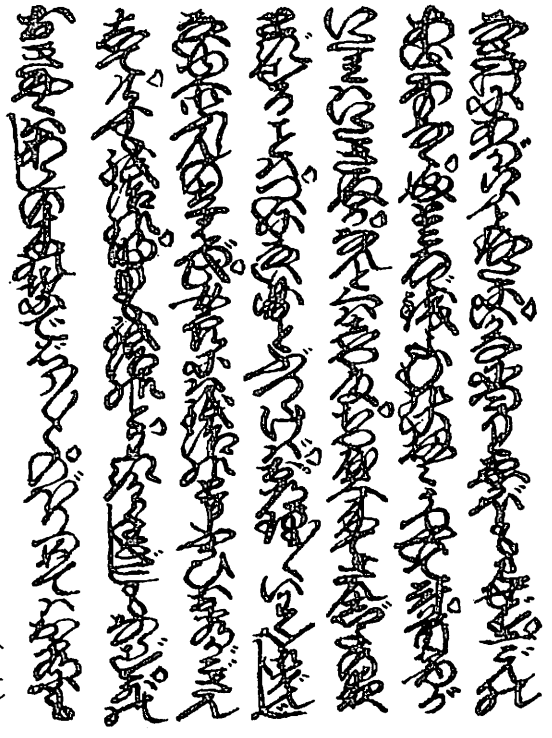
くはしや様さらば後に青なのひたし物と。口合たら〳〵立帰る。（ウ）（花車）（会・菜）（フシ）しごくかた手の侍。大きにぶけうしこりや何ンじや。人のつらを（ウ）（至極）（堅）（無興）（中）（詞）（面）めきゝするは身をちや入ちやわんにするか。なぶられには来申さぬ。此方のやしきはひるさへ出入かたく。一夜のたしゆつもるす（目利）（茶）（茶碗）（屋敷）（昼）（堅）（他出）（留守）ゐへことはり帳に付。むつかしいおきてなれ共。お名聞て恋した（居）（断）（③掟）（慕）ふたお女郎。どうぞと一座をねがひ。小者もつれず先刻参つて宿



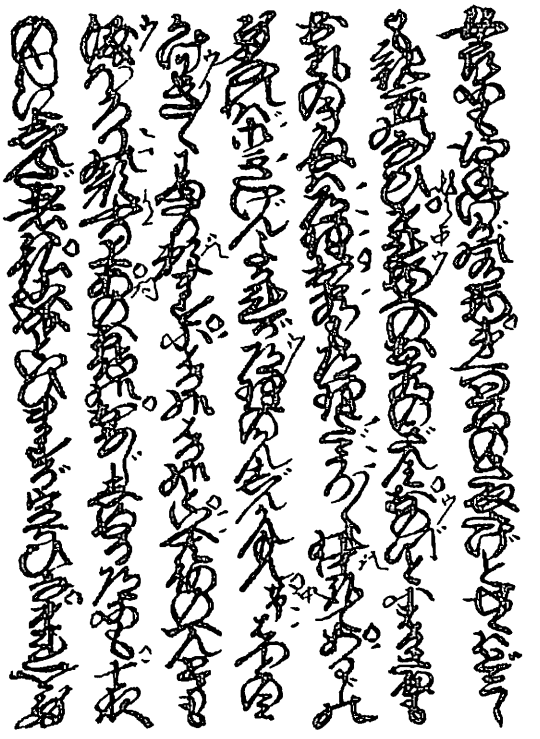
（7ウ）

① 身ずがら――「身すがら」
② したゝる――「したゞる」
③ 付――「つき」

を頼。①なんでも一生の思ひ出。おなさけにあづからふと存たに。（7ウ）」情
いかなにつこりとゑがほも見せず。一ごんのあいさつもなく。ふ
笑顔　言　挨拶　懐
ところで銭よむ様に扨々うつふいて計。首筋がいたみはいたさぬ
俯　痛
か。なんとくはしや殿。ちや屋へ来てさんじよの夜とぎすること
花車　茶　産所　伽
は。ついにない図とぶつゝけば。お道理〳〵いわくを御ぞんじな
無　曰　存
いゆへ御ふしんの立はづ。此女郎には紙治様と申ふかひお客がご
不審　深
さんして。けふも紙治様。明日も紙治様と。わきから手ざしもな
今日　脇　差
らず。外のおきやくはあらしの木の葉でばら〳〵〳〵。のぼりつ
客　嵐
めてはお客にも女郎にも得手けがの有物。第一つとめのさまたげ
勤　妨　怪我
」（8オ）
とせくはどこしも親方のならひ。それゆへのお客のぎんみ。おの
堰　習　地色中ウ　吟味
づと小はるさまもお気のうかぬは道理。お客も道理だうり〳〵の
浮　道理
中取て。あるじの身なれば御きげんよかれが道理のかんじんかん
主　機嫌　肝腎　肝

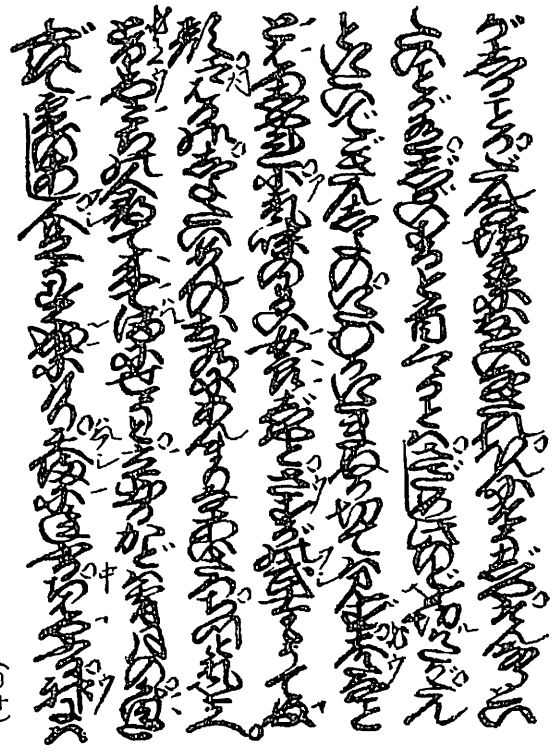


（8オ）



（8ウ）

もん。（文）サアはつとのみかけわさ〳〵わつさり頼ます。（飲）小はる様は
る様と。（言）いへ共何のへんとうも涙ほろりの顔ふり上。（返答）（無）（色）（詞）あのお侍様。
おなじしぬる道にも。（死）十夜の内にしんだ者は。（死）仏に成といひます
が定かひな。それを身がしることか。（旦那）だんな坊主におといなされ。
」（8ウ）
ほんにそうじや。そんならといたいことが有。（問）じがいすると首く
くるとは。（自害）さだめし此のどを切ルかたが。（喉）（方）たんといたいでござん
しよの。（痛）いたむかいたまぬか切てはみず。（痛）大かたなことはつし
やれ。（地）（問）ア小気味のわるい女郎じやと。（ウ）さすがの武士もうてぬ顔。
エ、はる様。（詞）しよたいめんのお客にあんまりなあいさつ。（初対面）（挨拶）ちつと
気をかへ。（地色）とりやこちの人尋て来て酒にせうと。（ハル）立出るかどは宵
月の。（門）かけかたぶきて雲のあし。（影）人足（フシ）うすく成にけり。（脚）（薄）
天満（ハルフシ）に年ふる。（経）ちはやふる。（中）神にはあらぬ紙様と世のわに口にの
」（9オ）（鰐）

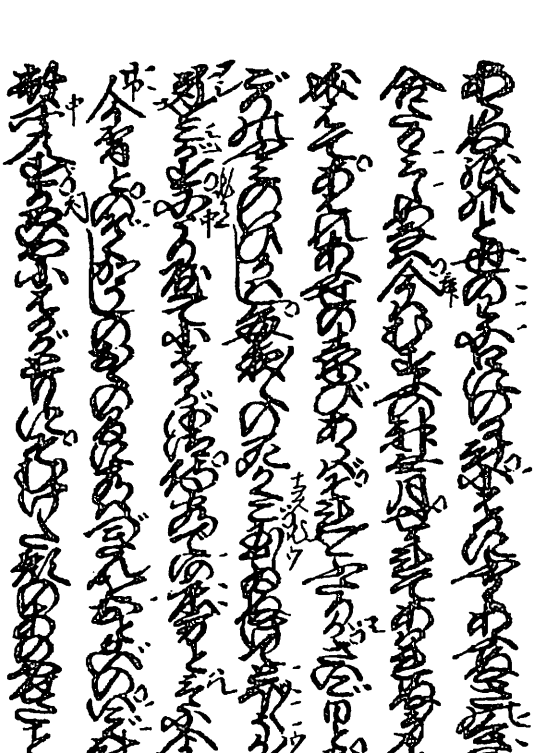


（9オ）

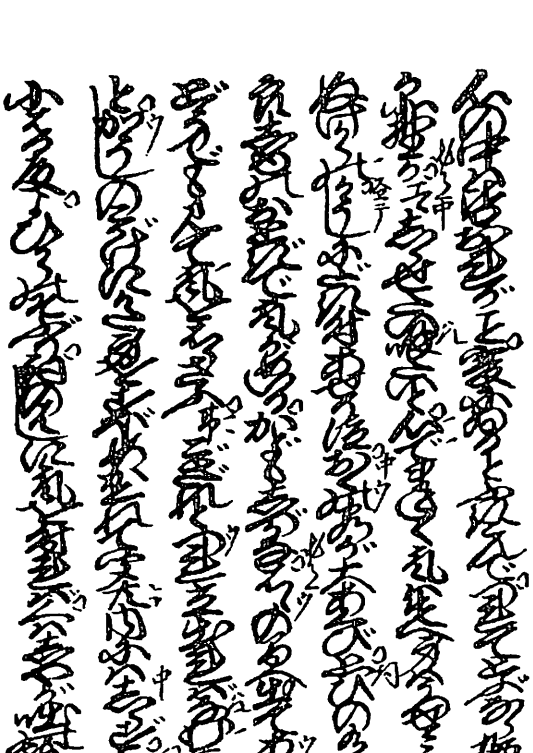
① 頼――「頼み」

る計。小はるにふかくあふぬさのくさり合たるみしめなは。今は（舞）（深）（会・大幣）（鎖）（身・御注連縄）むすふの神無月。せかれてあはれぬ身と成はて。あはれあふせの（結）（会）（逢）（瀬）しゆびあらば。それをふたりが。さいご日と。なごりのふみのい（首）（尾）（二人）（最）（期）（文）（言）ひかはし。毎夜〳〵の死かくご。玉しゐぬけてとぼ〳〵うか〳〵（交）（覚）（悟）（地ウ）（ナヲス）（魂）（①）身をこがす。（フシ）

（地色中）にうり屋て小はるが沙汰。侍客で河庄方とみゝに入よりサア今宵（煮売）（耳）（ハル）と。のぞくかうしのおくの間に客はづきんをおとがいの。いごく（格）（子）（奥）（頭巾）（頤）（動）計に声聞えず。かはいや小はるがともしに。そむけた顔のあのや（詞）（中）（灯）（痩）せたことはい。心の中は皆おれがこと。爰にゐるとふきこんで。（吹）（込）（9ウ）つれてとぶなら梅田か北野か。（地色中）エ、しらせたい呼たいと。心でまね（飛）（知）（ハル）く気は先へ身はうつせみのぬけからの。かうしにだき付あせり泣。（空）（蟬）（抜）（殻）（格）（子）（抱）（スエテ）（中ウ）おくの客が大あくび。思ひの有女郎しゆのおとぎで気がめいる。（奥）（詞）（衆）（伽）



（9ウ）



（10オ）

かどもしづかな。地色ウはしの間へ出てあんどうでも見て気をはらさふ。
門　端　行灯

サアござれとつれ立出ればなむ三宝と。かうしのこかげにかた身
連　南無　格子　小陰　肩

をすぼめかくれて聞共内にはしらず。なふ小はる殿。よひからの
隠　知中　詞　宵

そぶり。詞のはしに気を付れば。くはしやが咄の紙治とやらと。
素振　端　花車　」(10オ)

心中する心と見た。ちがふまい。しに神ついたみゝへは。ゐけん
違　死　耳　意見

も道理も入まじとは思へ共。さりとはぐちのいたり。さきの男の
愚痴　至

無分別はうらみず。一家一もんそなたを恨にくしみ。万人に死顔
恨　門　憎

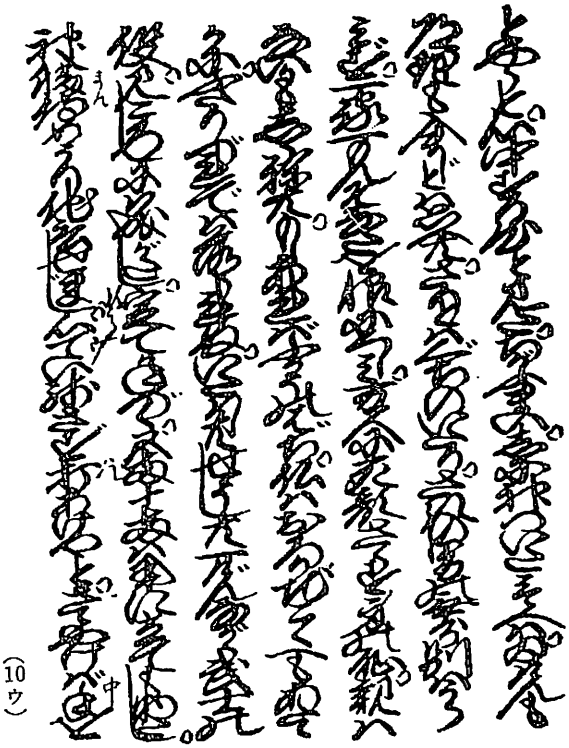
さらす身の恥。親はないかもしらね共。もしあればふかうのばち。
不孝　罰

仏はおろか地こくへもあたゝかに。ふたりづれでは落られぬ。い
獄　二人

たはし共せうし共一げんながら武士の役。見ころしには成がたし。
笑　止　見　殺

定てかねづく。五両十両は用に立ても助たし。②神八幡侍めうり他
銀　冥　利

言せまじ。地色ウ心てい残さず打あけやと。さゝやけば手を合せ。ア、
底　明　中　詞　」(10ウ)

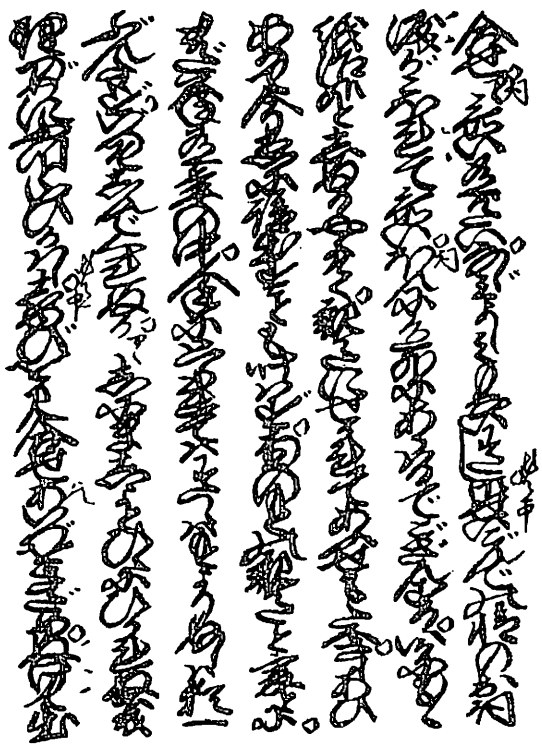


(10ウ)

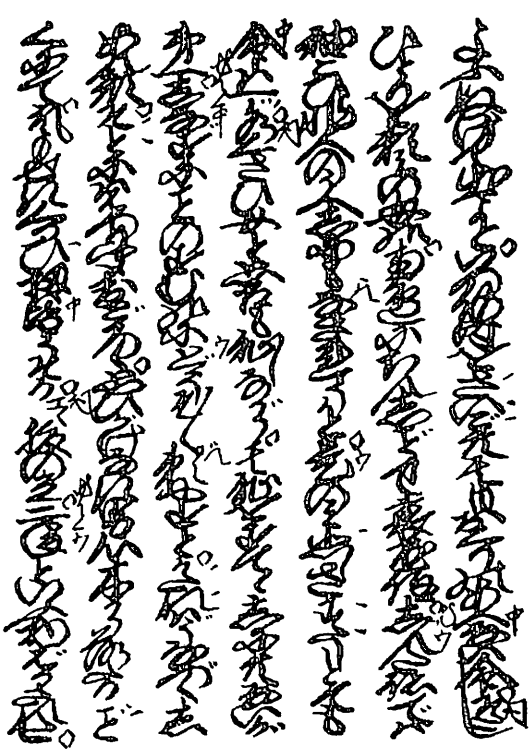
① うかゝ――「うかゝ」

② 神――「しん」

忝い有がたい。なじみよしみもないわたし。（地色中）御せいごんでの情の（誓言）（諠）（難）
お詞涙がこほれて忝い。（詞）ほんに色外にあらはるでござんする。い（表）（零）
かにも〳〵紙治様としぬるやくそく。親かたにせかれてあふせも（方）（逢瀬）（約束）（死）
たへ。さしあひありて今急に請出すことも叶はず。南のもとの親（元）
（絶）（差合）
かたと爰とに。まだ五年有年の①中。人手にとられてはわたしはも（取）
（方）
とよりぬしは猶一ぶんたゝず。いつそしんでくれぬか。ァ、しに（死）
（主）（分）
ましよとひくにひかれぬ義理づめにふつといひかはし。（地色中）しゆびを（首尾）（言交）（引）
見合せあいづをさだめ。ぬけて出よふぬけて出よと。いつ何時を（合図）
さいご共其日おくりのあへない命。（詞）わたしひとりを頼みの母様。（中）
（最期）（送）（一人）
南辺にちんしごとして裏屋住。（地ウ）しんた跡では袖こひ非人のうへし（仕事）（賃）（死）（乞）（飢）（死）
にもなされうかと。是のみ悲しさわたしとても命は一ッ。水くさ（中）（詞）（臭）
ひ女と思召も恥しながら。其恥をすてゝしに共ないが第一。（地色中）しな（死）（死）



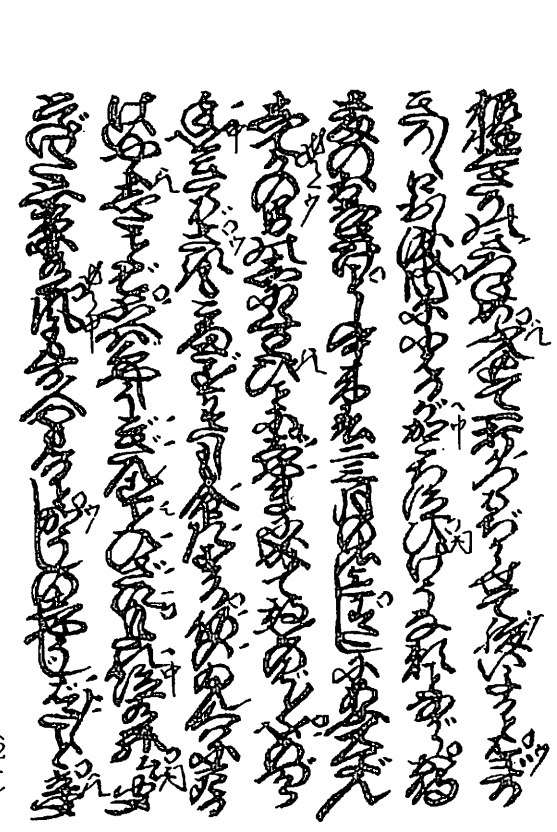
（11オ）



（11ウ）

ずにことのすむ様にどうそ〳〵頼やすと。かたればうなづくしあん顔。そとにははつと聞おどろく。思ひがけなき男心木から落たるごとくにて。気もせきくるひ扨は皆うそか。ヱ、腹の立。二年といふ物ばかされた。根性くさりのきつねめ。ふん込て一打かつらはぢかゝせて腹いよかと。はぎりきり〳〵口おし涙。内に小はるがかこち泣。ひけうな頼ことながら。お侍さまのおなさけ。ことし中来春二三月の比迄。わたしにあふてくだんして。かの男のしにゝくるたびことに。じやまに成て期をのばし〳〵。をのづからを手をきらば。さきもころさずわたしも命たすかる。何のゐんくはに死るけいやくしたことぞ。思へばくやしうござんすとひざに。もたれ泣有様。

ム、聞とゞけた思案有。風もくる人や見ると。かうしのしやうじ



① 年の中――「年ンのうち」

ばた〳〵と。立聞治兵衛が気も狂乱。ヱ、さすがうり物やす物め。
閉・」(12オ)　中　売　安

どしやうぼね見ちかへ。玉しゐをうばはれしきんちやく切め。切
土性　骨　魂　巾　着

ふかつかふかどうしやうじにうつる二人のよこ顔ヱ、くらはせた
突　為・障　子　横　食

いふみたい。何ぬかすやらうなづき合。おがむさゝやくほへるざ
踏　中　領　吠

ま。胸をおさへさすつてもこらへられぬかんにんならぬ。心もせ
摩　堪　堪　忍　中

きにせきの孫六一尺七寸ぬきはなし。かうしのさまより小はるが
急・関　格　子　狭間

脇腹。爰ぞと見極めゑいとつくに座はとをく。是はと計けがもな
突　遠　怪　我

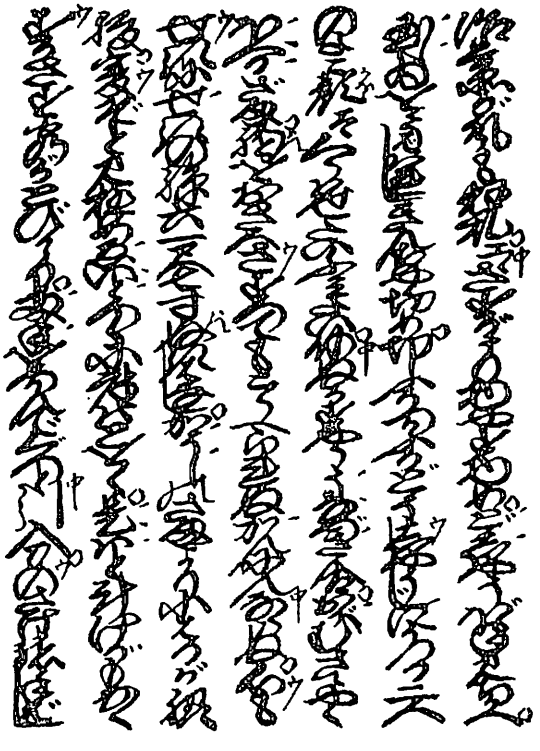
くすかさす客がとびかゝり。両手をつかんでぐつと引入。刀のさ
下　中

け緒手ばしかくかうしのはしらにがんじからみしつかとしめ付。
」(12ウ)　格　子　柱　拐　締

小はるさはぐな。のぞくまいぞといふ所にていしゆ夫婦立帰り。
騒　言　亭　主

是はとさはけばア、くるしうない。しやうじごしにぬき身をつき
騒　中　詞　障　子越　抜　突

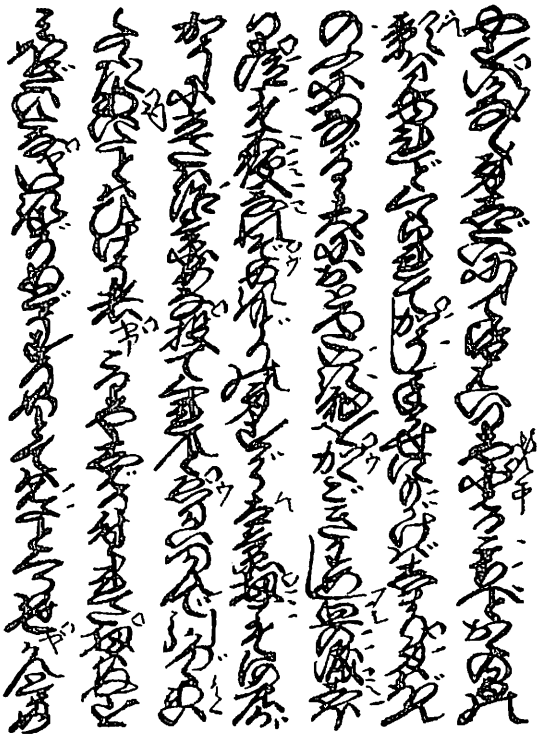
込あばれ者。うでをしやうじにくくり置。思案ありなはとくな。
腕　障　子　縄



(12ウ)

(13オ)

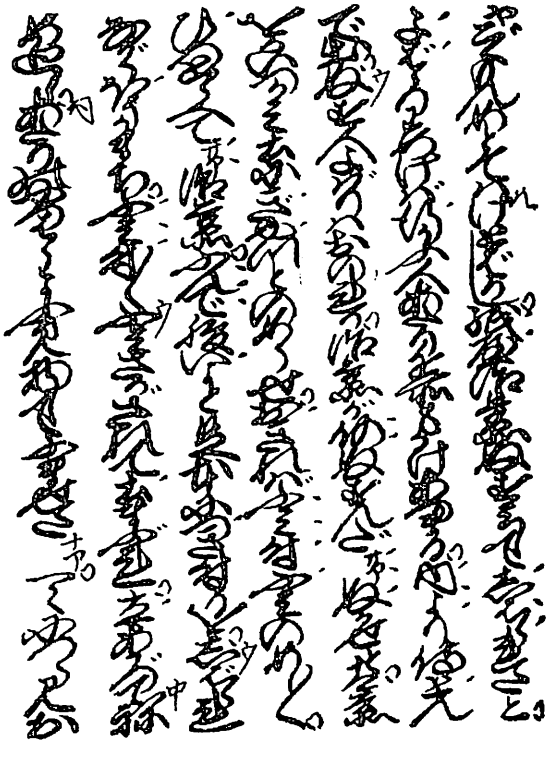
人立あれは所のさはぎ。サア皆奥へ。小はるおじやいてねよう。
あいとはいへど見しり有わきざしの。つかれぬ胸にはつとつらぬき。すいきやうのあまり色里には有ならひ。さたなしにいなしてやらんしたら。ナア河庄さん。わしやよさそうに思ひやす。いかな〳〵身しだいにして皆はいりや。小はるこちへとおくの間の影は見ゆれどく〻られて。かうし手かせにもがけばしまり。身はぼんのふにつながる〻犬におとつたいき恥を。かくごきわめし血の涙しほり。泣こそ不便なれ。
ぞめきもどりの身すがら太兵衛。扨こそ河庄がかうしに立たは治兵衛めな。投てくれんと。ゑりかいつかんで引かづくあいた〻た。
あいたとはひけう者。ヤアこりやしばり付られた。扨はぬすみはざいたな。ヤいきずりめどうすりめとてははたとくらはせ。ヤか



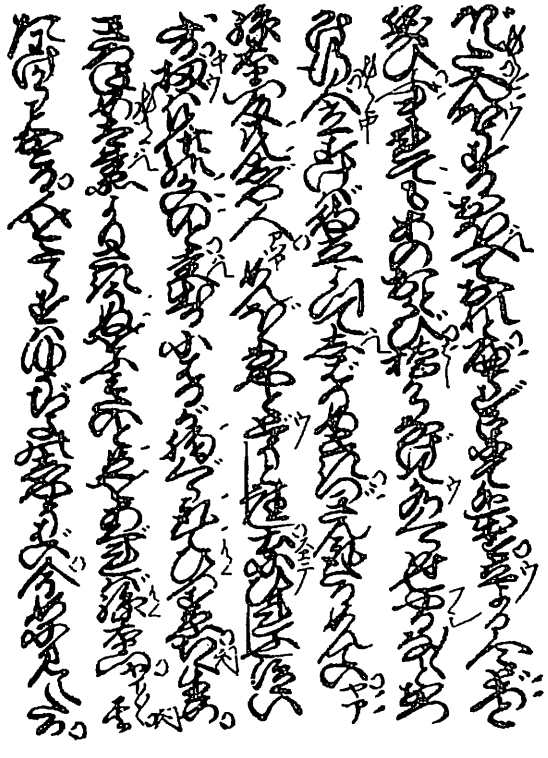
(13ウ)

① 手かせ――「手がせ」

んとうめヤごくもんめとてはけとばかし。紙屋治兵衛ぬすみして
盗(13ウ)」獄門　蹴　盗
しはられたと。よばゝりわめけば行かふ人あたり近所もかけあつ
縛　呼　交
まる。内より侍とんで出。ぬす人よばりはおのれか。治兵衛が何
盗　呼
ぬすんだサアぬかせと。太兵衛をかいつかみ土にぎやつとのめら
せ。おきればふみ付ふみのめし〳〵。ひつとらへてサア治兵衛。
起　踏　踏
ふんで腹いよと足本につき付るを。しばられながらほうかまち。
居　突　頬　酬
ふみ付〳〵ふみさがされて土まぶれ。立あがつてねめ廻し。あた
中　詞
りのやつはらよふ見物してふませたナア。一々につら見おぼえた。
地色ウ
へんほうするおほへておれと。へらず口にて逃出す。立よる人々
返　報　覚　寄
どつと笑ひ。ふまれてもあのおとがひ。橋からなげて水くらはせ
頤　ウ
やるな〳〵とおつかけ行。
遣　追
地色中
人立すけば侍立よつてしばりめとき。づきん取たるめんてい。ヤ
寄　縛　目　頭巾　面　体



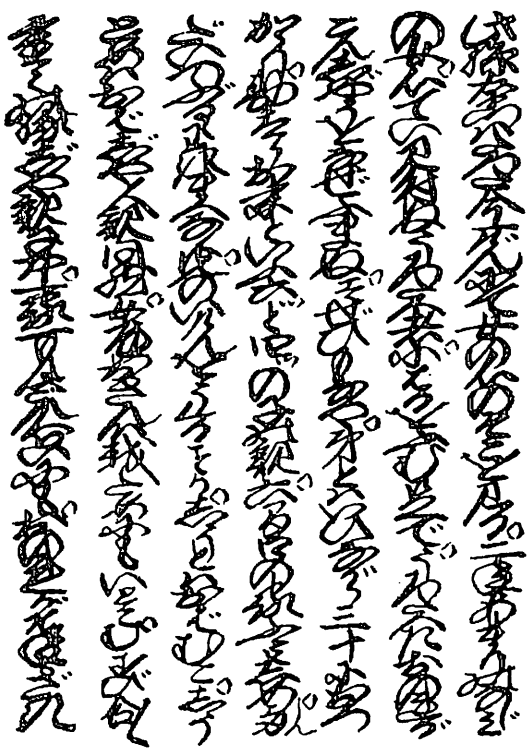
(14オ)



(14ウ)

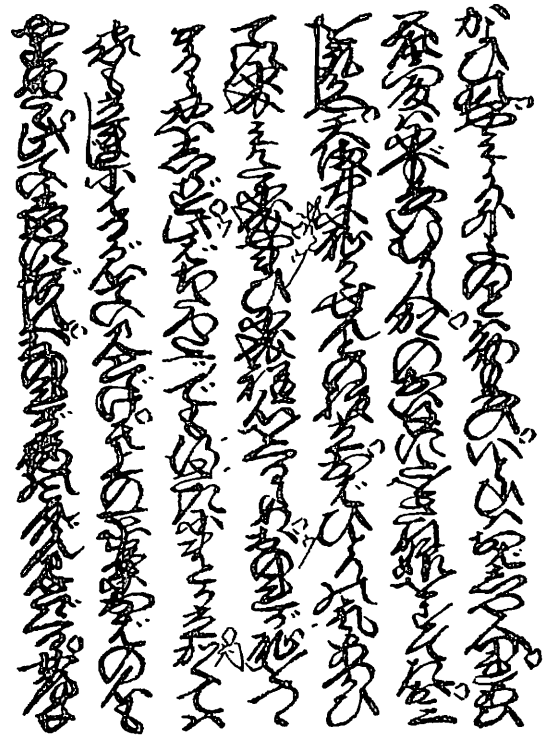
ア孫右衛門殿兄じや人。アッアめんぼくなやとどうと座し。土に(スエテ)ひれふし泣いたる。

扨(中ウ)は兄御様かいのと。走出(ハル)る小はるが胸ぐら取てひつする(色)。ちく(詞)生め。きつねめ。太兵衛(地色ハル)よりさきうぬ(狐)をふみたいと足(先)をあぐれば(踏)孫右衛門(色)。ヤイ〳〵〳〵。其(詞)たわけからことおこる(事)。人をたらすはゆうぢよのしやうばい(遊女商売)。今めに見えたか(目)。此孫右衛門はたつた今一げんにて女の心のそこ(見底)を見る。二年あまりのなじみ(馴染)の女。心て(底)い見付ぬうろたへ者。小はるをふむ(踏)足で。うろたへたおのれがこ(根)んじやうをなぜふまぬ(踏)。ヱ、ぜひもなや。弟とはいひながら三十(性)におつかゝり。勘太郎お末といふ六ッと四ッの子の親。六間口の家ふみしめ(踏)。身だいつぶるゝわきまへなく(代)。兄のいけんをうくる(意見受)ことか。しうとはおばむこ(舅叔母婿)。しうとめはおばじや人(姑叔母)親同然。女房

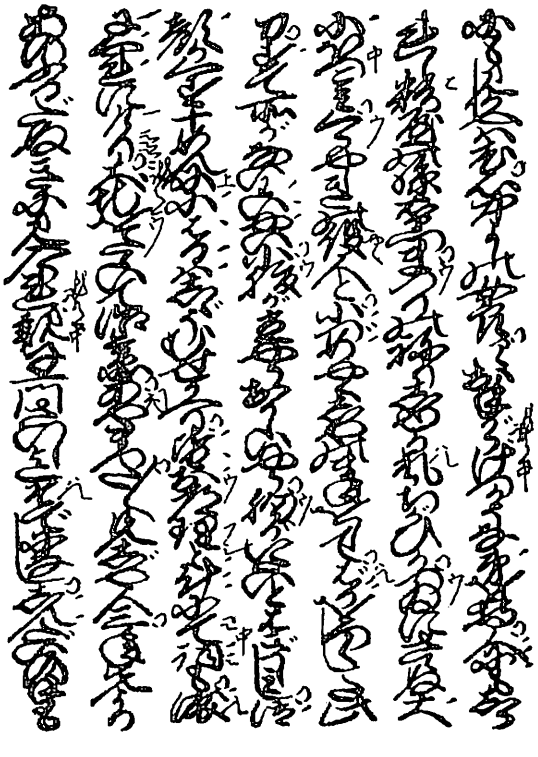


(15オ)

おさんは我ためにもいとこ。むすび合〳〵重々の縁じや親子中。
三　者　仲
一家一もんさんくはいにも。おのれがそねざきかよひの。くやみ
門　参　会　曾根崎」(15オ)　悔
より外よのことは何もなひ。いとしひはおばしや人。つれあひ五
余　叔母　連　合
左衛門殿はにべもないむかし人。かゝのおい子にたをされ娘をす
昔　甥　倒
てた。お三を取かへし。天満中に恥かゝせんとの腹立。おばひと
返　叔母
りの気あつかひてきに成みかたに成。やまひに成程心をくるしめ。
扱　敵　味方　病
おのれが恥をつゝまるゝ恩しらず。此ばちたつた一ッでも行さき
知　罰　先
にまとか立。かくては家も立まじ小はるが心てい見とゞけ。其上
的　詞　底
の一思案おばの心もやすめたく。此ていしゆにぐめんし。おのれ
叔母　亭　主　工面
が病のこんげん見とゞくる。女房子にも見かへしは尤。心中よし
根　元　届　」(15ウ)　替
の女郎。ァ、お手がら。けつかうな弟を持。人にもしられし粉屋
結　構　知
の孫右衛門。まつりのねりしゆか気ちがひか。つゐにさゝぬ大小
祭　練　衆　違

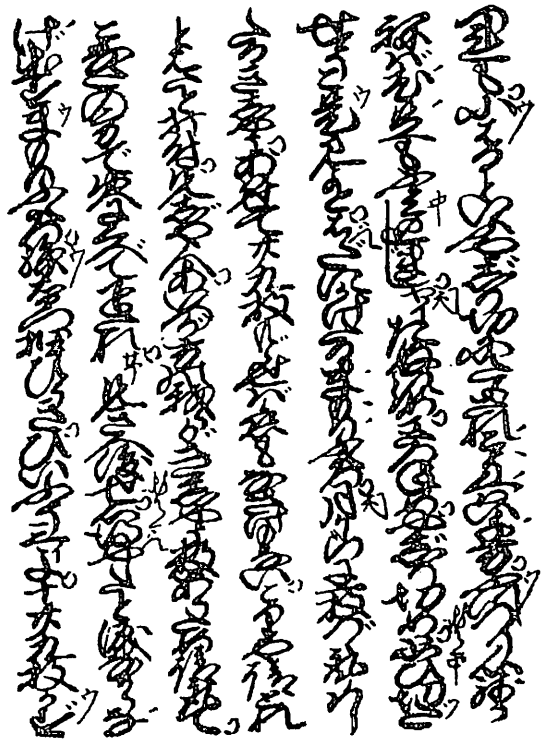


(15ウ)



(16オ)

ほつこみ。くらやしきの役人と。小づめやくしやのまねをして。
蔵屋敷　詰役者
ばかをつくした此刀。すて所がないわいやい。小腹が立やらおか
捨
しいやら。胸がいたいとはぎしみし。泣顔かくす十めんに小はる
痛　歯　渋面　上
はしぐうむせかへり。皆お道理と計にて詞も。涙にくれにけり。
始終　無
地色
大地をたゝいて治兵衛。詞あやまつた。〳〵兄じや人。三年先より
あのふるだぬきに見入られ。地色中親子一門さいし迄そでになし。しん
古狸　妻子　袖　身
だいの手もつれも。小はるといふやじり切にたらされこうくはい
代　縺(16オ)　屋尻　後悔
千万。ふつつり心残らねば尤足もふみ込まじ。詞ヤイたぬきめ。き
踏　狸　狐
つねめ。やじり切め。地色中思ひ切ッたせうこ是見よと。はだにかけた
屋尻　証拠　肌
るまもりふくろ。詞月かしらに一枚づゝ取かはしたるきしやう。あ
守袋　頭　交　起請　合
はせて廿九枚もどせば恋もなさけもない。こりや請とれとはたと
戻　情　取
打付。兄じや人。あいつが方の我らがきしやう数あらため請取て。
起請



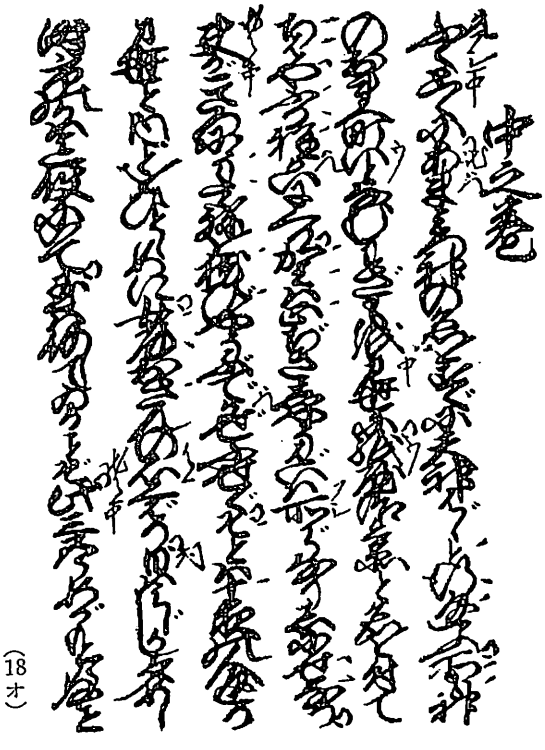
(16ウ)

こなたの方で火にくべて下され。サア兄きへ渡せ。地色心得やしたと
涙なからなげ出すまもりふくろ。孫右衛門押ひらき。ひいふう三
イよ。十廿九枚かずそろふ。外に一通女のふみこりや何ンじやと。
ひらく所をア、そりや見せられぬ大じのふみと。取付を押のけ。
あんどうにてうはがき見れば小はる様まいる。紙屋内さんより。
よみもはてずさあらぬ顔にてくはいちうし。是小はる。さいぜん
は侍めうり。今は粉屋の孫右衛門あきないめうり。女房かぎつて
此ふみ見せず我一人ひけんして。きしやう共に火に入ル。せいも
んにちがひはない。ア、忝い。それでわたしが立ますと。又ふし
しづめば。ハア〈〈〈。うぬが立の立たゝぬとは。人がましい。
是兄じや人。地色かた時もきやつがつらが見ともなし。いざごされ去
ながら。此無念口おしさどうもたまらぬ今生の思出。女がつら一

ッふむ。ごめんあれとつゝとよつてじだんだふみ。（寄・色・詞・踏）エ、〳〵しなしたり。（地色）足かけ三年恋しゆかしもいとしかはいも。（ハル）けふといふけふ（今日・今日）たつた此あし一本のいとまこひと。（足・暇・乞）ひたひぎはをはつたとけて。（額・際・蹴）わつと泣出し兄弟づれ。（上）帰るすかたもいた〳〵（ウ・姿）敷跡を見送（おくり）声をあげ。なげく小はるもむごらしき。ぶしんぢうか心中か。（不心・中）誠のこゝろは女ばうの其一ふでのおくふかく。（ウ・心・房・筆・奥）たがふみも見ぬこひのみち（ウ・誰・文・踏・ウ・恋・道）わかれて。（上）こそは（三重）〳〵かへりけれ。（17ウ）

中之巻

（ハルフシ・中）ふくとくに。（地ハル・福・徳）あまみつ神の名をすぐに天神ばしと行通ふ。（天・満・橋）所も神のおまへ町いとなむわざも紙見世に。（ウ・前・業・中）紙屋治兵衛と名を付てちは（ウ・千・早）やふる程かいにくる。（ハル・振・降・買）かみは正ぢきしやうばいは所がらなりしに（フシ・紙・神・直・商・売・老舗）



（18オ）

① 立たゝぬ――「たゝぬ」

せなり。

地色中 夫がこたつにうたゝねを枕びやうぶでかぜふせぐ。そとは十夜の
炬燵 寝 屏風 風 外

人通り見世と内とをひとしめに。女房おさんの心くばり。日はみ
一締 三 色 詞 短

じかし夕めし時市のかは迄使にいて。玉は何してゐることぞ。
飯 側 行

地色中 此三五郎めがもとらぬことかぜがつめたい二人の子共がさむから
戻 (18オ)風 寒

ふ。おすゑが乳のみたいじふんもしらぬ。あほうには何が成し
末 飲 時分 知

んきなやつじやと独色こと。詞かゝ様ひとりもどつたと走帰る兄むす色
言 戻 地 息子

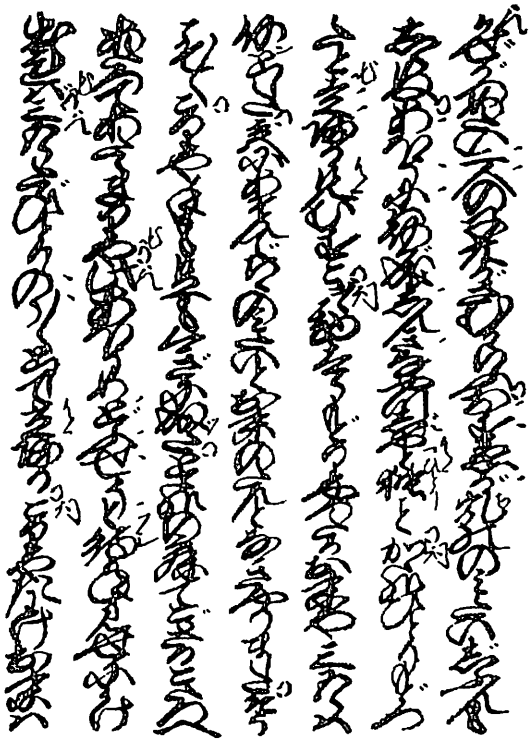
こ。詞ヲ、勘太郎もどりやつたかお末や三五郎は何ンとした。宮に
戻

あそんでちゝのみたいとお末のたんとなきやりました。そうこそ
乳 泣

〳〵。こりや手も足もくぎに成ッた。とゝ様の寝てござるこたつ
釘 炬燵

へあたつてあたゝまりや。地ハル此あほうめどふせうと待かね見せにか
暖 世 駆

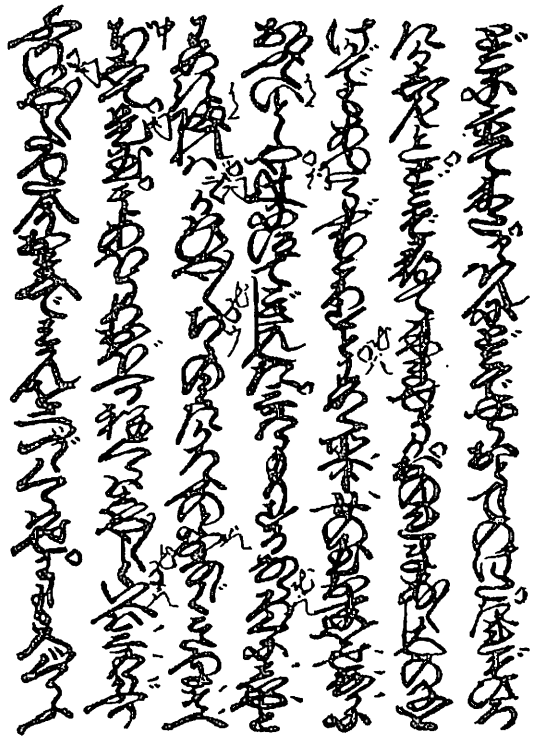
け出れば。



(18ウ)

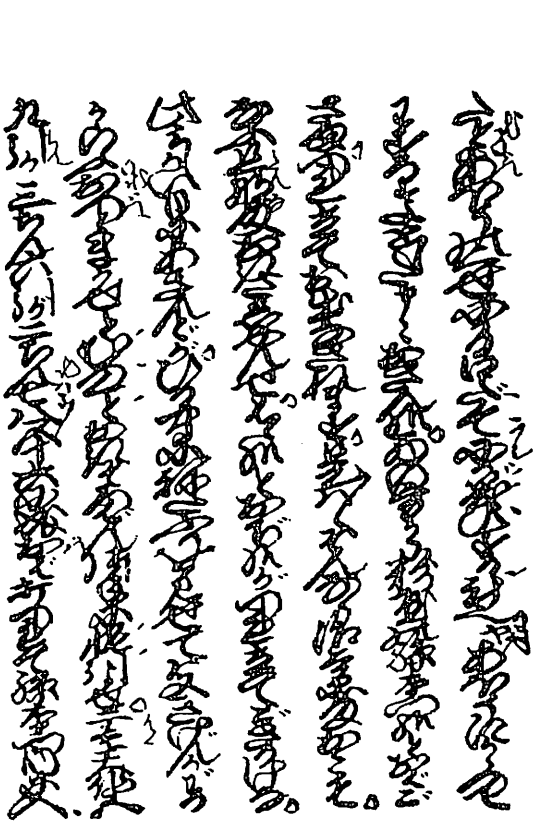
三五郎（地ハル）たゞひとりのら〳〵として立帰る。（色）こりやたわけお末はど（詞）（18ウ）こに置て来た。ァ、ほんにどこでやらおとしてのけた。たれぞひ（拾）ろたかしらん迄。どこぞ尋て来ませうか。おのれまあ〳〵大しの（落）（知）（事）子をけがでもあつたらぶちころすと。（殺）（怪我）わめく（地ハル）所へ下女の玉お末を せなかにおふ〳〵いとしや。（色）（背中）（負）辻に泣てごさんした。（詞）三五郎もりす（守）るならろくにしやとわめき帰れば。（色）（地ハル）ヲ、かはひや〳〵。（詞）ちゝのみ（地ウ）（喚）（乳）たかろふのとおなじくこたつにそへぢして。（ハル）（中）（詞）是玉。其あほうめお（詞）（炬燵）（添）（乳）（覚）ぼへる程くらはしや〳〵と。（食）（言）いへは（地ハル）三五郎かぶりふり。（頭）いや〳〵（詞）たつた今お宮でみかんを二ッづゝくらはせ。わしも五ッくらふた（蜜柑）（19オ）と。あほうのくせにかるロだてにが笑ひする計也。（地ハル）（軽）（苦）（フシ）

ヤあほうにかゝつてわすりよとした申々おさん様。西の方から粉（詞）（忘）（三）屋の孫右衛門様とおばごさま。つれ立てお出なされます。是は（叔母）（御）（連）



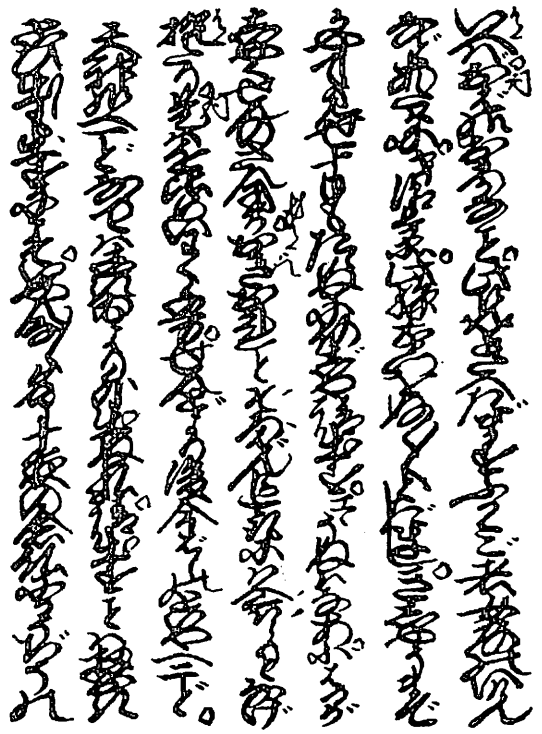
（19オ）

〳〵そんなら治兵衛殿おこそ。なふ旦那殿おきさしやんせ。はゝ
起　起　母
様とおぢ様がつれ立てござるけな。此みしかい日にあきんどが。
伯父　連　短　商人
ひる中にねたふりを見せては又きげんがわるからふ。おつとまか
昼　寝　悪　地ハル
せとむつくとおきそろばん片手に帳引よせ。二壱天作五九引か三
起　算盤　色　進　進
ちん六引が二ちん。七八五十六に成おば打つれて孫右衛門内に入
十　十　地ウ　叔母　ハル　(19ウ)
は。ヤ兄じや人おば様是はよふこそ〳〵先是へ。私は只今急なさ
詞　算
ん用いたしかゝる。四九卅六匁三六が壱匁八分ゝて二分の勘太郎
欠
よお末よ。ばゝ様おぢ様お出じやたばこほん持ておじや。一三が
地ハル　煙草　盆
三それおさんおちや上ましやと口ばや成。
三　茶　フシ　早
いや〳〵ちやもたはこものみにはこぬ。是おさん。いかにわかい
詞　茶　煙草　飲　三　若
とてふたりの子の親。けつかうな計みめではない。男の性のわる
二人　結　構　見目
いは皆女房のゆだんから。しんだいやぶりめをとわかれする時は
油断　身代　女夫　別


(19ウ)

(20オ)

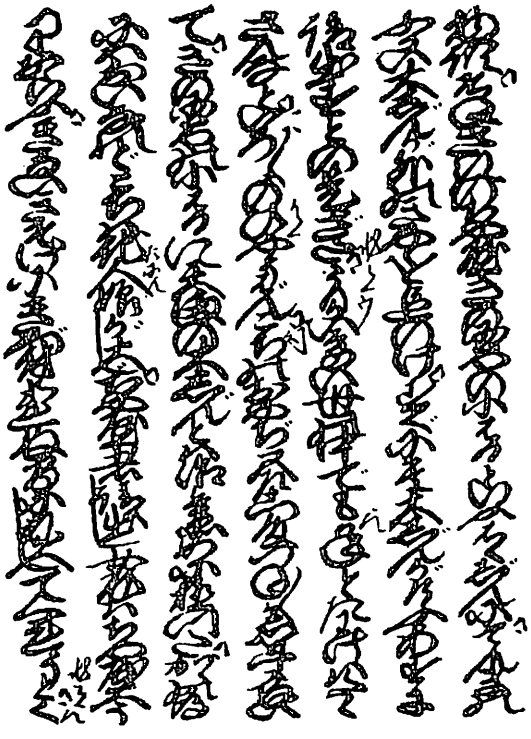
おとこ計の恥じやない。④少（地色ウ）めをあいて気（ハル）にはりをもちやいのとい（色）へば。おば様（詞）おろかなこと。此兄をさへだますふかくご者女房の（不覚悟）いけんなどあたゝかに。ヤイ治兵衛。此孫右衛門をぬく〳〵とだ（意見）まし。きしやうまでかやして見せ十日もたゝぬに何じや請出す。（起請返）エ、うぬはなあ。小はるがしやくせんのさん用か。おきおれとそろ（地色ハル借銭算措算盤）ばん追取にはへくはらりとなげ捨（色）たり。是（詞）は近比めいわく千万。（庭投迷惑）せんどより後今ばしのといやへ二ど。天神様へ一どならてはしき（先度橋問屋度敗）ゐより外出ぬ私。⑤請出すことは扨おき思ひ出しも出すにこそ。（居言）やんな〳〵夕へ十夜の念仏にかうぢうの物語。そねさきのちや屋（講中（20ウ）曽根崎茶）きの国やの小はるといふはくじんに。てんまのふかい大じんが外（紀伊屋白人天満尽）のきやくを追のけ。すぐに其大じんがけふあすに請出すとの是ざ（客尽今日明日沙）た。うりかい（地色ウ）高い世の中でもかね（ハル）とたわけはたくさんなと。いろ（汰売買銀）



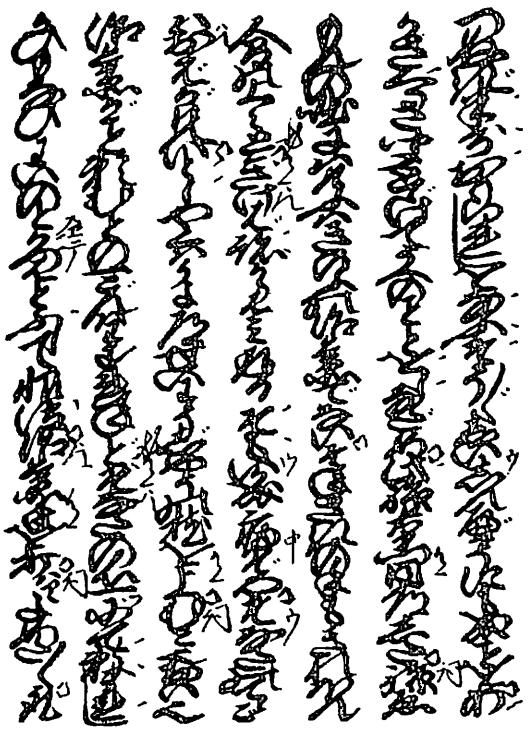
（20ウ）

① 天作五――「てんさくの五」
② 三ちん――「さつちん」
③ 二ちん――「につちん」
④ 少――「ちと」
⑤ 私――「わたくし」

〳〵のひやうばん。こちのおやぢ五左衛門殿つね〳〵名を聞ぬいて。きの国やの小はるに天満の大じんとは治兵衛めに極つた。かゝの為にはおいなれどこちは他人娘が大じ。ちや屋者請出し女房はちや屋へうりおらふ。きるいきそけにきづ付られぬ間に取かへしてくれうと。くつぬぎ半分おりられしをなふそう〳〵しいしん」(21オ)べうにも成ことを。あかさくらさ聞とゞけてうへのこととをしなだめ。此孫右衛門同道した。孫ゑもんの咄にはけふはきのふの治兵衛でない。そねさきの手もきれほん人間の上々と。きけば跡からはみ返るそもいか成病ぞや。そなたのてゝごはおばが兄。いとしやくはうよ道せいわうじやうの枕を上。むこ也おい也治兵衛がこと頼むとの一ごんはわすれねど。そなたの心一ッにて頼まれしかひもなひわいのとかつはとふして恨泣。

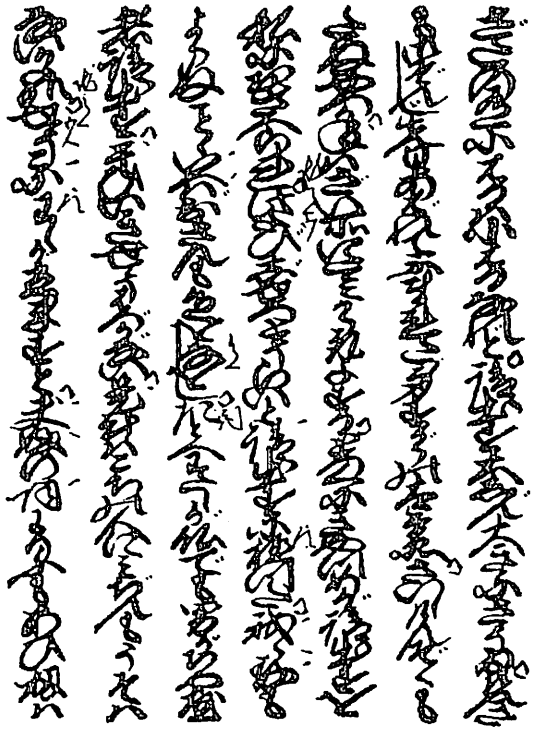


(21オ)



(21ウ)

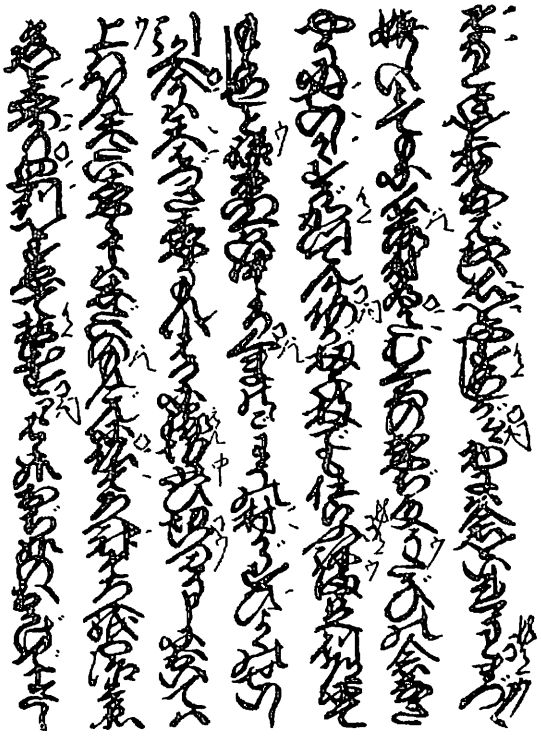
治兵衛手を打。ハア、よめた〳〵。取ざたの有小はるは小はるなれど。請出す大じん大きにさうゐ。兄きも御ぞんじ先日あばれて(21ウ)ふまれた身すがらの太兵衛。さいしけんぞくもたぬやつ。かねはざい所いたみから取よする。とつくにきやつめが請出すを私にお①さへられ。此たびじせつとうらいと請出すに極つた。我ら存もよらぬことゝいへばおさんも色をなをし。たとへわたしが仏でも男がちや屋者請出す。其ひいきせうはづがない。是計はこちの人にみぢんもうそはないかゝ様。せうこにわしが立ますと。夫婦の詞わりふもあひ扨はそうかと手を打ておばおい心をやすめしが。」(22オ)、物には念をいれうこと。まづ〳〵嬉しいとてもに心落付為。かたむくろのおやぢ殿うたがひの念なきやうにせいしかゝすがかつてんか。何が扨千枚でも仕らふ。弥満足則道にてもとめしと孫右

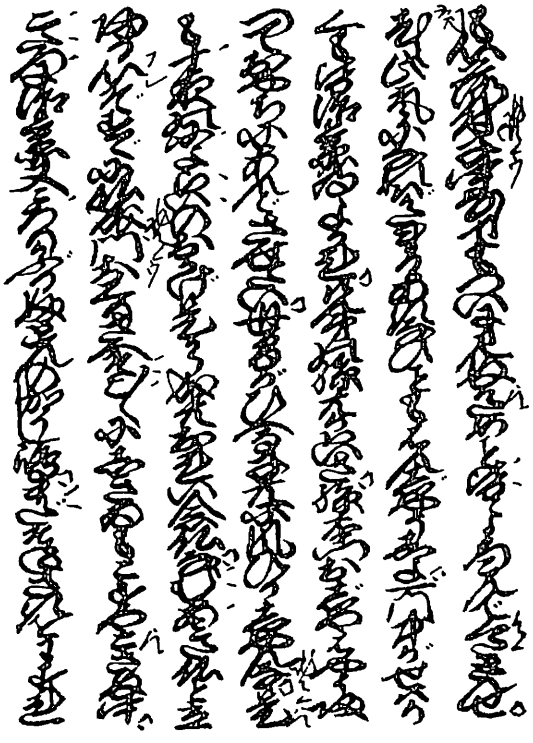


(22オ)

① 私――「わたし」

衛門くはい中より。くまの〻ごわうの村がらすひよくのせいし引
懐 熊野牛王 群烏 比翼 誓紙
かへ。今は天ばつきしやうもん小はるに縁切思ひ切。いつはり申
罰 起請文 ①中 偽
においては上はほん天たいしやく下はしだいのもんごんに。仏そ
②梵帝釈 四大文言 ③揃
ろへ神そろへ紙や治兵衛名をしつかり。血判をする色て指出す。ア、詞
揃 屋
は〻様おぢ様のおかげでわたしも心落付。子中なしてもついに見
仲
ぬかためこと皆々よろこんでくたさんせ。ヲ尤々此気になればか
固 下 詞 固
たまるあきなひこともはんじやうしよ。一門中がせはかくも皆治
商事 繁昌 世話
兵衛為よかれ。兄弟の孫共かはいさ。孫右衛門おじやはやう帰つ
早
ておやちにあんどさせたい。世間がひへる子共に風ひかしやんな。
親父安堵 冷
是も十夜のによらいのおかげ是から成共おれい念仏。なむあみた
如来 礼 南無阿弥陀
仏と立帰る心ぞすぐに仏成。
門おくりさへそこ〳〵にしきゐもこすやこさぬ中。こたつに治兵
送 敷居 炬燵





衛又ころりかぶるふとんのかうし島。まだそねさきをわすれずか（被布団格子縞曽根崎忘）」（23オ）

とあきれながら立よつて。ふとんを取て引のくれは枕につたふ涙（寄布団）

のたき身もうく計泣ゐたる。（滝浮）

引おこし引立こたつのやぐらにつきすへ。かほつく〳〵と打なが（地色ハル起炬燵櫓突据顔色）

め。あんまりしや治兵衛殿。それ程なこりおしくばせいしかゝぬ（詞名残誓紙）

がよいわいの。おとゝしの十月中のゐの子にこたつ明た祝義とて。（一昨年亥炬燵）

まあ是こゝで枕ならべて此かた。女房のふところには鬼がすむか（方懐）

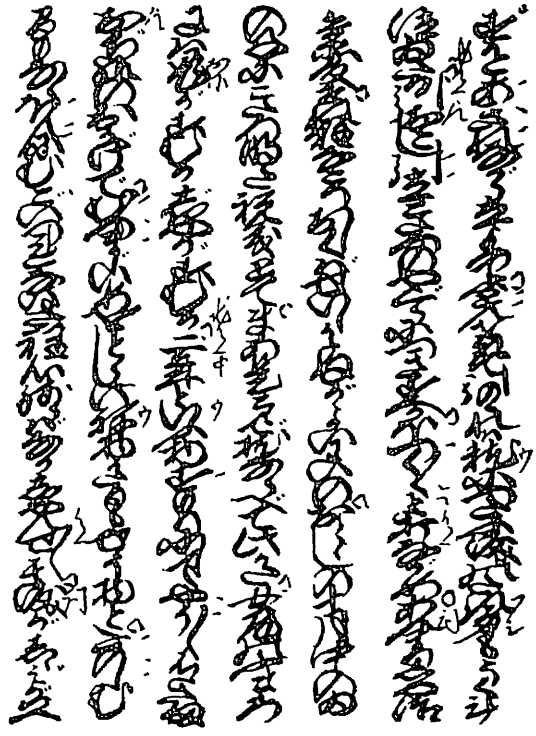
じやがすむか。二年といふ物すもりにしてやう〳〵はゝさまおぢ（地色中蛇巣守母ハル）

様のおかげで。むつまじいめをとらしいね物かたりもせう物と。（女夫寝語）

たのしむ間もなくほんにむごいつれないさ程心残らばなかしやん（惨泣）

せ〳〵。其涙がしゞみがはへながれて小はるのくんでのみやらふ（色詞蜆川汲飲）」（23ウ）

ぞ。エ、きよくもないうらめしやと。ひざにだき付身をなげふし（地色ハル曲恨膝上抱フシ）



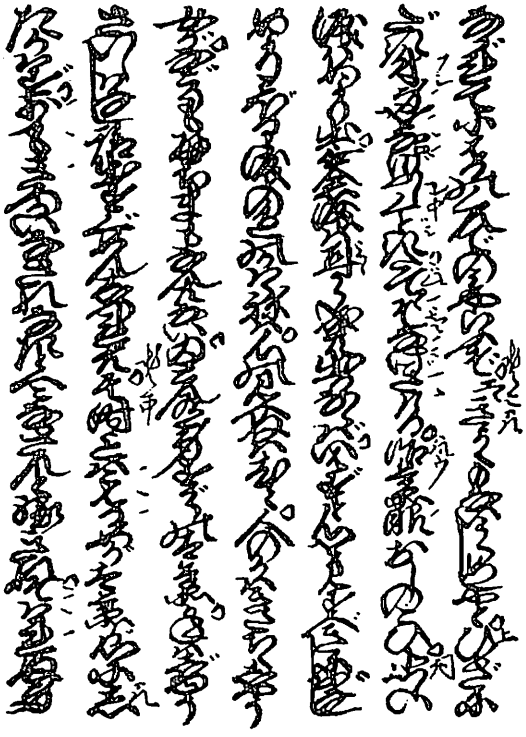
（23ウ）

① 縁切思ひ切――「ゑんきり思ひきる」

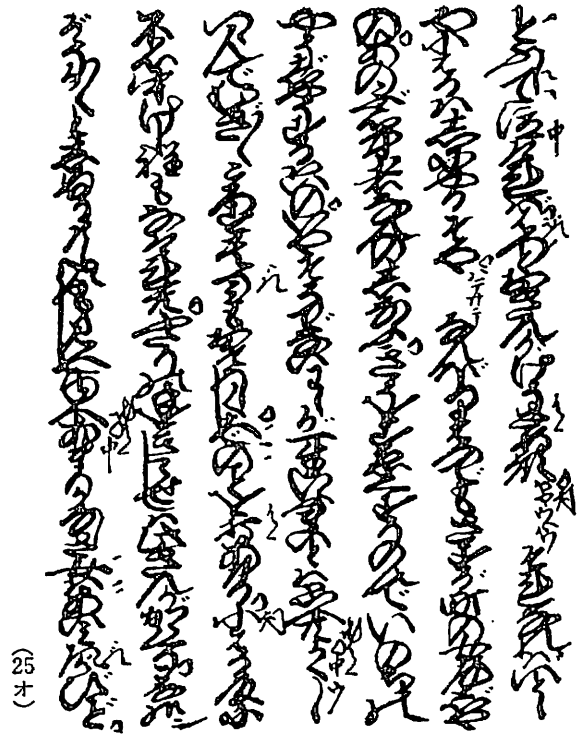
② ほん天――「ぼんでん」

③ 仏そろへ神そろへ――「仏ぞろへ神ぞろへ」

中
くどき。たてゝぞなげきける。
嘆
治兵衛眼おしのこひ。悲しい涙はめより出。無念涙は耳から成共
押　拭　詞　目　ハルウ
出るならば。いはずと心を見すべきに。おなしめよりこぼるゝ涙
言　目
の色のかはらねは。心の見へぬは尤々。人のかはきたちくしやう
変　皮　着　畜　生
女が。なごりもへちまもなん共ない。ゐこん有身すがらの太兵衛。
名残　遺恨
かねはじゆうさいしはなし請出すぐめんしつれ共。其時迄はこは
銀　自由　妻　子　工面　地色中　小
るめが太兵衛が心にしたかはず。少もきつかいなされなたとへこ
気遣　ハル
なさんと縁きれ。そはれぬ身に成たり共。太兵衛には請出されぬ
添　色　詞
もしかねぜきで親かたからやるならば。物の見ことに死んで見し
銀　堰　方　遣　事
よと。たび〳〵詞をはなちしがこれ見やのいて十日もたゝぬ中。
放　退
太兵衛めに請出さるゝくさり女の四ッ足めに。心はゆめ〳〵のこ
腐　残　地色ハル
らね共。太兵衛めがいんげんこき。治兵衛しんだいいきついての
色　詞　身代



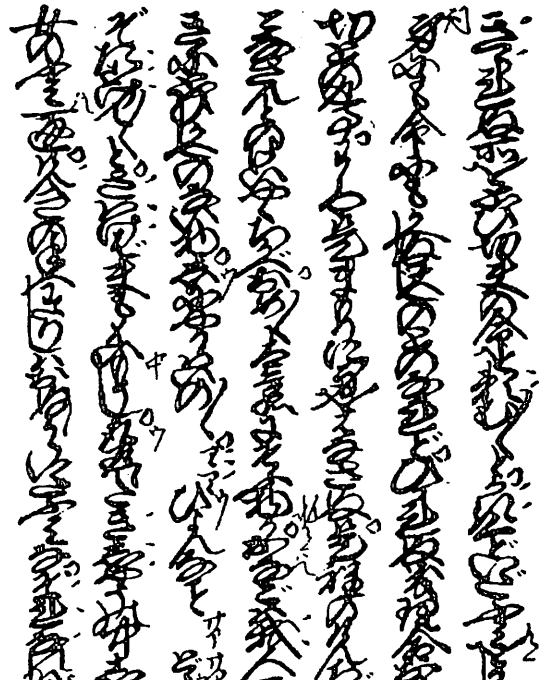
かねにつまつてなんどゝ。大坂中をふれ廻りとい屋中の付合にも。
銀　触　問
つらをまぶられいき恥かく胸がさける身がもへる。ェ、口おしい
面　地色ハル　生　上　燃
無念なあつい涙血の涙。ねばい涙を打こへねつてつの涙がこぼる
熱　ウ　ち　熱　鉄　ウ
ゝとどうとふして泣ければ。
（24ウ）」　伏　スエテ　中
はつとおさんがけうさめ顔。ヤアウハウそれなればいとしや小はる
ハル　三　興　色　詞
はしにやるそや。ハテサテなんぼりはつでもさすが町の女房じやの。
死　利発
あのぶ心中者なんのしなふ。きうをするくすりのんでいのちのや
不　死　灸　薬　命　養
うじやうするはいの。いやそうでないわしが一生いふまいとは思
生　言
へ共。かくしつゝんでむざ〳〵ころす其つみもおそろしく。大じ
隠　地色中ウ　殺　罪　ハル　事
のことを打あける。小はる殿に不心中けし程もなけれ共。ふたり
明　色　詞　芥子　二人
の手をきらせしは此さんがからくり。こな様ンがうか〳〵としぬ
三　死
るけしきも見へしゆへ。あまりかなしさ女はあいみたがびごと。
気色　地色中　悲　①相身互　ハル　（25オ）」



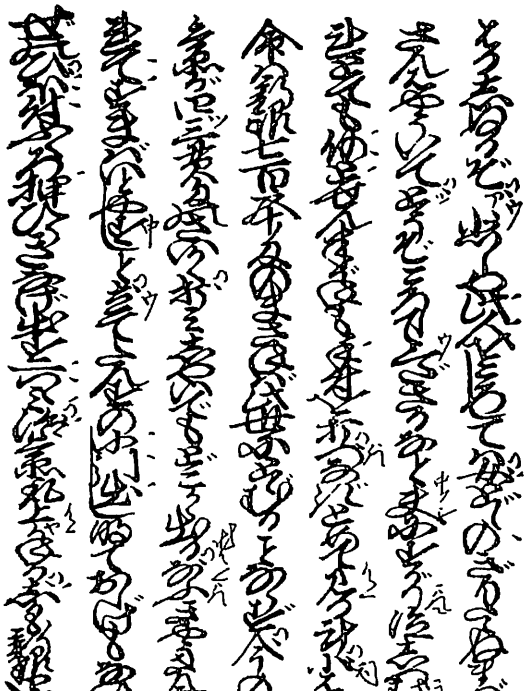
（25オ）

① あいみたがびごと――「あひみたがひごと」

きられぬ所を思ひ切夫の命を頼む〳〵と。①かきくどいだふみをか（文）（色）（感）
んじ。身にも命にもかへぬ大じのとのなれど。ひかれぬ義理合お（詞）（事）（殿）（思）
もひ切との返事。わしや是まもりに身をはなさぬ。是程のけんぢ（守）（賢）（女）
よがこなさんとのけいやくちがへ。おめ〳〵太兵衛にそふ物か。（契）（約）（添）
（地色ハル）おなごは我人一むきに思ひかへしのない物。しにやるはいの〳〵。（女子）（向）（返）（死）
ア、ア、ひよんなことサアサアサどうぞたすけて〳〵と。さはけば夫（騒）（助）
もはいもうし。取返したきしやうの中しらぬ女のふみ一通。兄き（廃亡）（中）（起請）（文）
の手へわたりしはおぬしからいたふみな。それなれば此小はるし（行文）（25ウ）（死）
ぬるぞ。ア、悲しや此人をころしては。女どしのぎりたゝぬまづ（殺）（同士）（義理）
こなさんはやういて。どうぞころしてくださるなと夫にすがり泣（早行）（殺）（中フシ）
しつむ。（沈）
（地色ウ）それとても何とせん半がねも手付を打。つなぎとめてみる計。小（銀）（色）（詞）



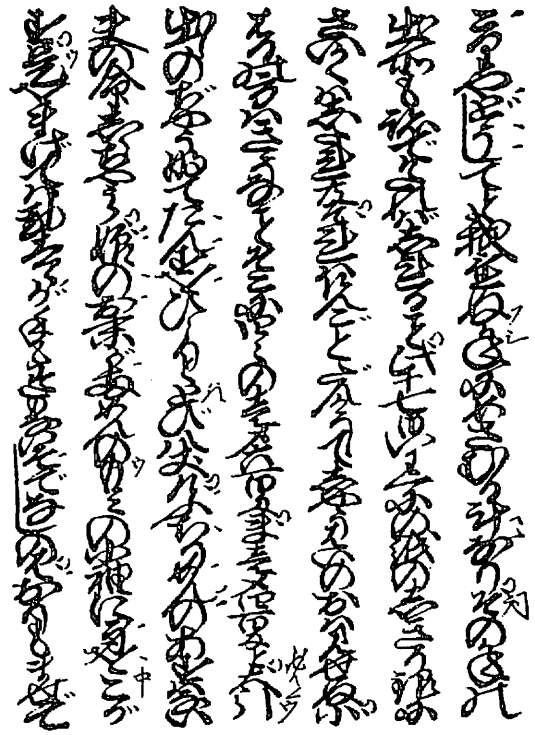
（25ウ）



（26オ）

はるが命は新銀七百五十匁のまさねば此世にとゞむることならず。今の治兵衛が四ッ三貫匁のさいかく。打みしやいでもどこから出る。なふきやうさんなそれてすまばいとやすしと。立てたんすの小引出し明ておしげもなひまぜの。ひほ付ふくろ押ひらきなげ出す一つゝみ。治兵衛取上かねか。しかも新銀四百め。こりやどうしてと我置ぬかねにめさむる計なり。

そのかねの出所も跡でかたればしれること。此十七日いわくにの紙のしきり銀にさいかくはしたれ共。それは兄ごとだんかうしてしやうはいのおは見せぬ。小はるの方はきうなことそこに四々の壱〆六百匁。ま壱〆四百匁と。大引出しのぢやう明てたんすをひらりととび八丈。けふちりめんのあすはない夫の命しらちやうら。娘のお末が両めんのもみの小袖に身をこがす。是をまげては勘太



① かきくどいだ――「かきくどいた」

郎が手もわたもないそでなしの。はおりもまぜてぐんないのしま
綿 袖 無 羽織 (26ウ)郡 内 縞・始末

つしてきぬあさきうら。くろはふたへの一ちやうらぢやうもん丸
着 浅 葱 裏 黒 羽 二 重 張 羅 定 紋

につたのはの。のきものかれもせぬ中は内はだかでもそとにしき。
蔦 葉 軒・退 退 仲 裸 外 錦

男かざりの小袖迄さらへて物数十五色。内ばに取て新銀三百五十
飾 摂

匁。よもやかさぬといふことはない物迄も有顔に。夫の恥と我ぎ
貸 無 義

りをひとつにつゝむふろしきの中に。なさけをこめにける。
理 一 風呂敷 情

わたしや子共は何きいでも男はせけんが大じ。請出して小はるも
詞 着 世間 事

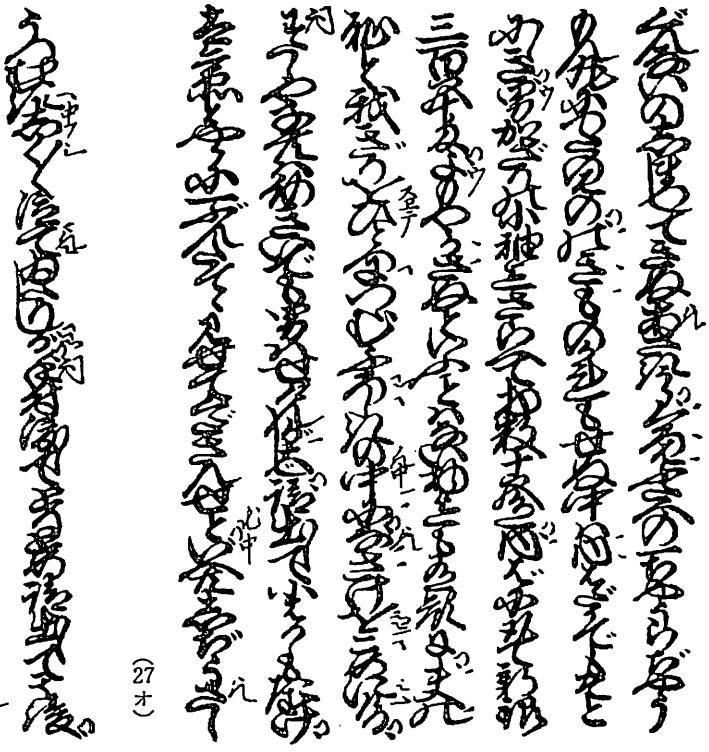
たすけ。太兵衛とやらに一ぶんたてゝ見せてくださんせと。
助 分 言

共しぢうさしうつむきしく〳〵泣てゐたりしが。
始終 (27オ)

手付渡してとりとめ請出して其後。かこふて置か内へ入るゝにし
詞 取 止 囲

てから。そなたは何と成ことぞといはれてはつと行あたり。アッ
言 色 当 詞

アそうじや。ハテなんとせう子共のうばか。まゝたきか。ゐんき
乳母 飯 炊 上 隠 居



(27オ)

(27ウ)

よ成共しませうとわつとさけびふしづむ。

あまりにめうがおそろしい此治兵衛には親のばち天のばち。仏神のばちはあたらず共女房のばち一ッでもしやうらいはようないはづ。ゆるしてたもれと手を合くどきなげゝはもつたいない。それをおがむことかいの手足のつめをはなしても。皆おつとへのはう」(27ウ)

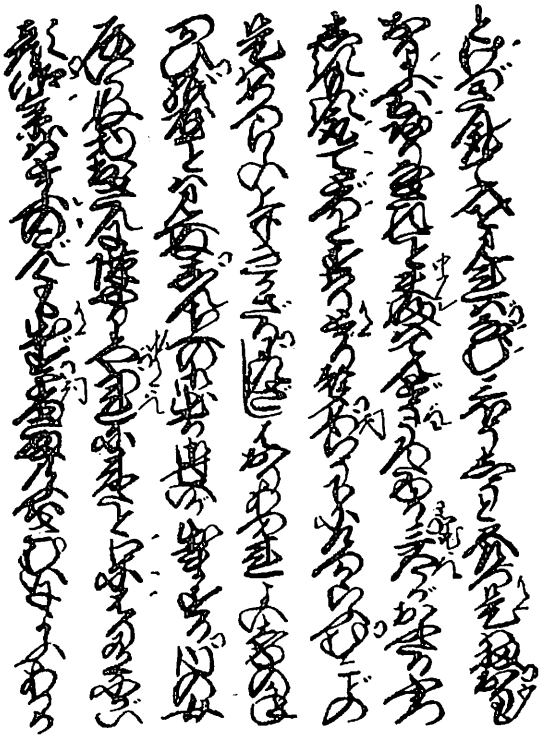
かう紙といやのしきりかね。いつからかきるいをしちにまをわたし。わたしがたんすは皆あきがらそれおしいとも思ふにこそ。何いふても跡へんでは返らぬ。サア〳〵はやふ小袖もきかへてにつこり笑ふていかしやんせと。下にくんないくろはふたへ島のはをりにさやの帯。金こしらへの中わきざしこよひ小はるが血にそむとは仏やしろしめさるらん。

三五郎爰へとふろしきづゝみかたにおほせて供につれ。金もはだ

(28オ)

① 有顔——「あるかほ」

身にしつかと付立出る門の口。治兵衛は内においやるかとけづき
居 (28オ)」 毛頭巾
ん取て入を見れば。なむ三ほうしうと五左衛門是は扨。おりもお
南無 宝 舅 折 折
りよふお帰りなされたと夫婦はてんどううろたゆる。
中フシ 転 倒
三五郎がおふたるふろしきもぎ取てどつかとすはりとがり声。
地ハル 風呂敷 座 色 詞 女
らう下にけつからふ。むこどの是はめつらしい上下きかざり。わ
郎 婿 殿 珍 着 脇
きざしはおりあつはれよいしゆのかねつかひ。紙屋とは見へぬ。
差 羽織 能 衆 銀 遣
しんちへの御出か御せいが出まする。内の女房いらぬ物おさんに
新 地 精 三
隙やりや。つれに来たと口にはり有にがい顔。治兵衛はとかふの
地色ハル 針
ごんくも出ず。とつさまけふはさむいにようふあるかしやんす。
言 句 詞 今日 寒 歩 」(28ウ)
先おちや一ッとちやわんをしほに立よつて。ぬしの新地通ひも。
地色ウ 茶 茶 碗 ハル 寄 色 主 詞
さいぜんはゝ様孫右衛門様お出なされて。だん〳〵の御ゐけんあ
母 意見 熱
つい涙をながし。せいしをかいてのほつきしん。母様に渡されし
哲 紙 発 起心 地色ウ



(28ウ)

(29オ)

がまだ御らん(ハル)なされぬか。ヲ(ウ)、せいしとは此ことかとくはい(ハル)中より取出し。あほうぐるひする者のきしやうせいしは方々先々。かき出し程かきちらす。がてんいかぬと思ひ〳〵来ればあんのこと

詞 誓紙 懐 狂 起請 誓紙 書 合点 案

く。此ざまでもぼん天たいしやくか。此手間でさり状かけとずん(ハル)

梵 帝 釈 地色ウ 去

〳〵に引さいてなげ捨たり。夫婦はあつとかほ見合せあきれて。

投 顔

詞もなかりしが。」(29オ)

地ハル 頭 色 詞 以前

治兵衛手をつきかうべをさげ。①御腹立(りつふく)の段尤共おわび申すはいぜ

んのこと。今日のたゝ今より何こともじひと思召。おさんにそは

事 慈悲 三 添

せて下されかし。地色中ウたとへば治兵衛こつじきひにんの身となり。諸(ハル)

乞 食 非人

人の箸(はし)の余りにてしんみやうはつなぐ共。おさんはきつと上にす

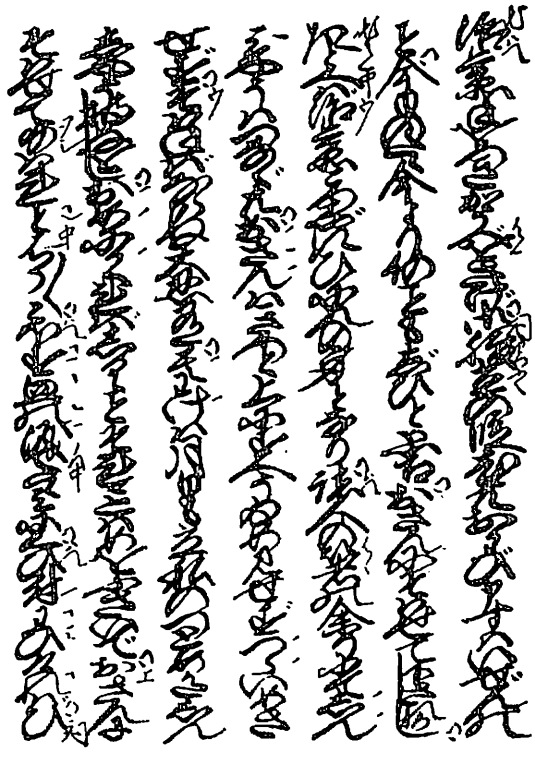
身 命 三 据

へうゐ(ウ)め見せずつらいめさせず。そはねばならぬ大恩有。其わけ

変 目 辛 目 添 訳

は月日も立私のつとめかたしんしやう持なをし。おめにかくれば

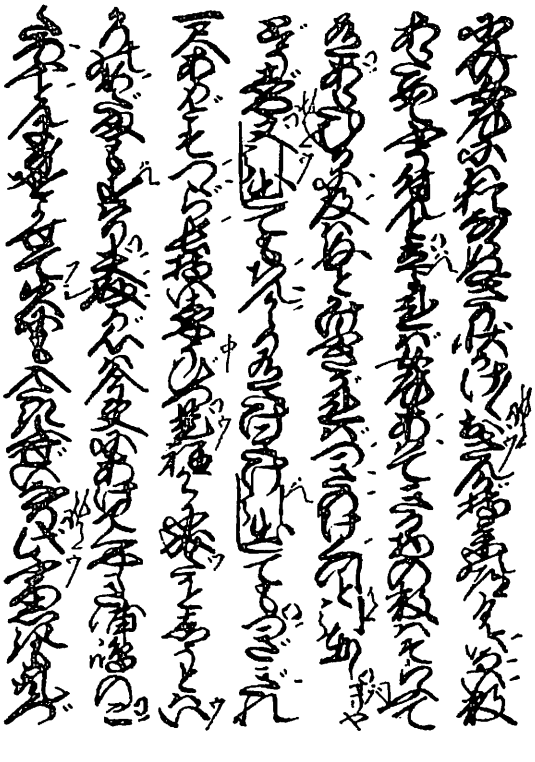
勤 方 身 上 直 目



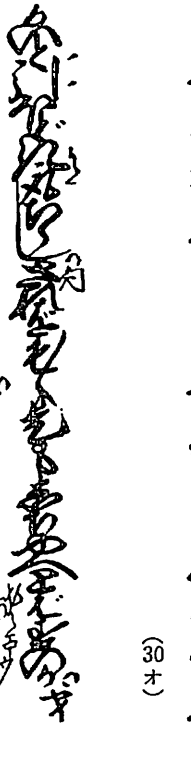
(29ウ)

① 御腹立(りつふく)――「御りつふく」

しるゝことそれ迄はめをふさいで。おさんにそはせて給はれとは
知　目　上　三　添　中
ら〳〵。こほす血の涙たゝみに。くひ付わひければ。
零　畳　ノル中　食　ハル　詫
ひにんの女房には猶ならぬさり状かけ〳〵。おさんが持参の道具
詞　去　地色ウ　三
非」(29ウ)
いるい数あらためてふう付んと。立よれば女房あはてきる物の数
衣類　封　ハル　寄　ハル　慌　着
はそらふて有。あらたむるに及はぬとかけふさがればつきのけく
揃　駆　突
つと引出し。コリヤどうじや。又引出してもちんからり有たけこ
詞　色　地色ウ
たけ引出しても。つぎぎれ一尺あらばこそつゞら長持いしやうび
ハル　継　切　葛籠　衣裝　中　櫃
つ。是程からに成ッたかとしうとはいかりのめだまもすはり。夫
空　ウ　舅　怒　ウ　目玉　据　ハル
婦が心は今更にあけてくやしき浦島の。こたつふとんに身をよせ
開　炬燵　布団
て火にも入たきふぜいなり。
フシ　風情
此ふろしきも気づかいと引ほどき取ちらし。されはこそ〳〵是も
地色ウ　風呂敷　色　詞
」(30オ)
しちやへとばすのか。ヤイ治兵衛女房子共の身のかははぎ。其か
質屋　飛　皮　銀

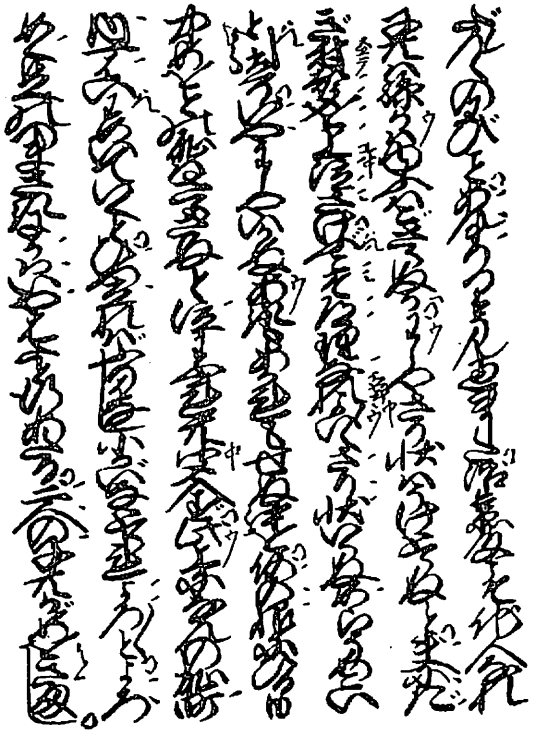


(30オ)



(30ウ)

ねでおやまぐるひ。いけどうすりめ女房共はおばおいなれど此五
左衛門とはあかの他人。そんをせうよしみがない。孫右衛門にこ
とはり兄が方から取かへす。さアさり状〳〵と七重のとびら八重
のくさり。百重のかごみはのがるゝ共のがれがたなき手づめのだ
ん。ヲ、治兵衛がさり状筆ではかゝぬ是御らんぜ。おさんさらば
とわきざしに手をかくるすかり付てなふ悲しや。とつ様身にあや
まりあればこそだん〳〵のわびこと。あんまりうん過ました。
治兵衛殿こそ他人なれ子共は孫かはゆふはごさらぬか。わしやさ
り状はうけとらぬと。夫にだぎ付声を上泣さけ。ぶこそ道理なれ。
よい〳〵さり状いらぬめらうめこいと引立る。いやわしやいかぬ
あきもあかれもせぬ中を。何の恨にひる日中めをとの恥はさらさ
ぬと泣わふれ共聞入ず。此上になんの恥町内一はいわめいていく



(31オ)

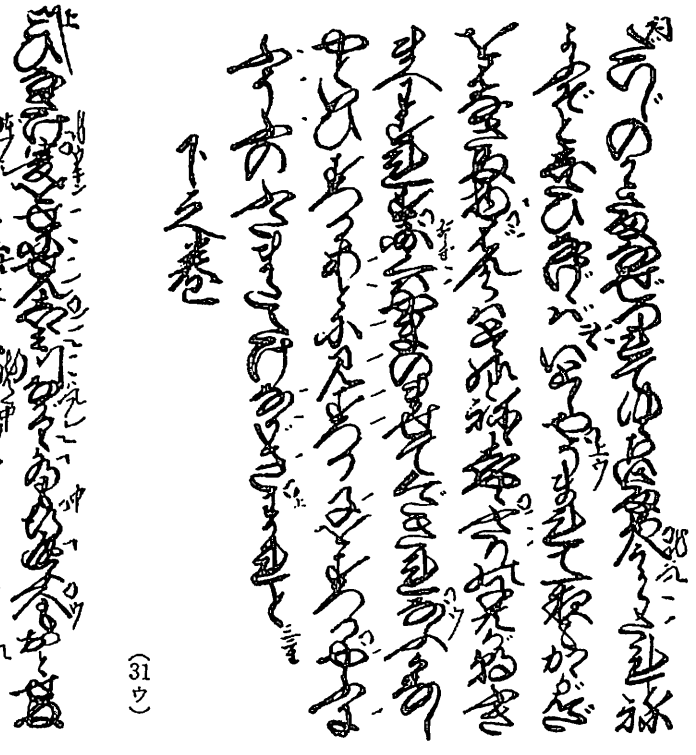
① よしみが――「よしみが」
② かごみ――「かこみ」
③ だぎ付――「たきつき」

と。ひつ立ればふりはなし小がいなとられよろ〳〵と。よろめく
振放　腕取
足のつまさきにかはいやはたと行あたる。二人の子共がめをさま
爪先　目　色
し。詞だいじのかゝさまなぜつれてゆくちいさまめ。地ハル今からたれと
（31オ）　様　連　祖父
ねよふぞとしたひなげゝばヲ、いとしや。上ウうまれて一夜もかゝが
寝　慕　嘆
はだをはなさぬ物。ばんからはとゝ様とねゝしやゝ。ふたりの子
肌　晩　寝　二人
共が朝ふさまへわすれす。必ずくはやまのませてくだされ。なふか
前　桑　山　悲
なしやといひすつるあとに見すつる子をすつる。やふにふうふの
言　捨　跡　捨　薮　夫　婦
ふたまたたけながき。上わかれと三重
二　股　竹　別

下之巻

（31ウ）

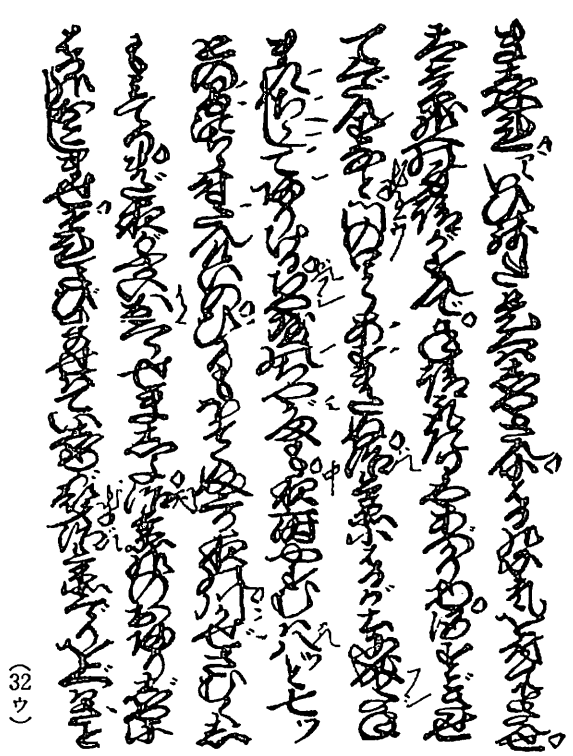
へこ上ひなさけ。地ウキン爰をせにせん。しゝみ川ながるゝ水も。中行通ふ。
恋　情　瀬　蜆　ハルフシ
人ウもおとせぬうしみつの。本フシ空十五夜の月さへて。地色中ウひかりはくらき
音　丑　三　光



（31ウ）

（32オ）

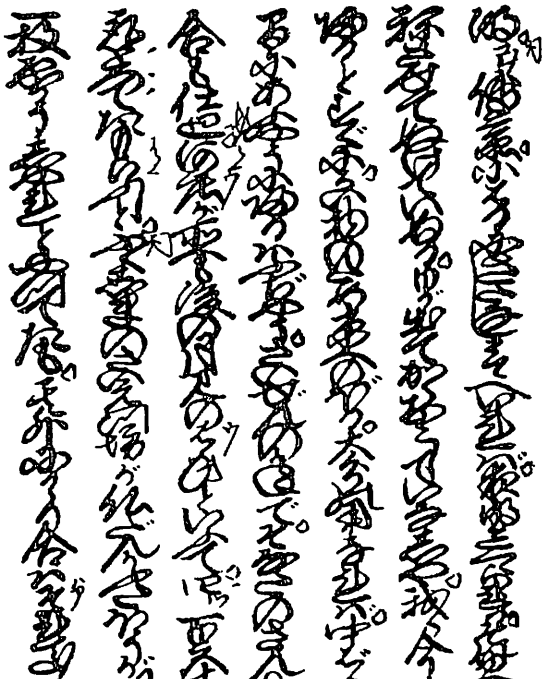
かどあんどうやまとや伝兵衛を一字がき。ねむりがち成ひやうし
門行灯大和屋書拍子
木にばん太が足取ちどり足。ごよざ〳〵も声ふけたり。
番千鳥御用心更
かこのしゆいかふふけたのと。上の町から下おなご。むかひの
詞駕籠衆更地色女子迎
かごもやまとやの。くゞりくはら〳〵つゝと入。きいの国やの小
駕籠止・大和屋潜①色紀伊詞屋
はるさんかりやんしよ。むかひと計ほの聞え。跡は三ッ四ッあいさ
借地色迎挨拶
つの。程なくくゞりによつと出。小はる様はおとまりじや。かこ
潜色詞泊駕籠
のしゆすぐにやすましやれ。ア、いひ残した是くはしやさん。小
衆休言花車
はる様に気を付て下さんせ。太兵衛様への身請がすんで。かね請
銀
取たりやあづかり物。酒すごさせてくだんすなと。門の口から
預過地色
あすまたぬ。治兵衛小はるが土に成たねまきちらして帰りける。
明日待種
ちや屋のちやがまも。夜一時やすむは八ッと七ッとの間にちら付
茶茶釜中
たんけいの。ひかりもほそくふくる夜の。川かぜさむくしもみて
短檠光更風霜



(32ウ)

① くはら〳〵――「ぐはら〳〵」

り。まだ夜がふかいおくらせましよ。（詞）治兵衛様のお帰りじや小は
（色）（送）
る様おこしませ。それよびませはていしゆが声。（地ハル）治兵衛くゞりを
（起）（呼）（亭主）（潜）
ぐはさと明。（詞）コレ〳〵伝兵衛。小はるにさたなしみゝへいれば。
（沙汰）（耳）
」（32ウ）
夜明迄くゝられる。それゆへよふねさせてぬけていぬる。日が出
（故）（寝）（脱）
てからおこしていなしや。我ら今から帰るとすぐに。かい物のた
（起）（買）
め京へのぼる。大分の用なれば。中ばらいの間にあふやうに帰る
（払）
はふぢやう。さいぜんのかねで。そなたのさんやう合も仕廻。
（不定）（銀）（算用）
河庄（地色ウ）が所へも後の月見のはらひ（ウ）といふて。四ッ百五十め請取（匁）（取）とつ
（払）
てたもらふしと。（詞）ふくしまのさいえつ坊が仏だんかふたほうが。
（色）（福島）（壇買）（奉加）
ぎん一枚（銀）ゑかうしやれとやつてたも。其外にかゝり合はハアそれ
（廻向）（掛）
よ〳〵。いそいちがはな銀（ぎん）五。是計じや仕廻ふてねやれ。（地色ウ）さらは
（花）（寝）
」（33オ）
〳〵もどつてあはふと。二足三（ハル）あし行よりはやく立帰り。わきざ
（会）（足）（早）（脇差）



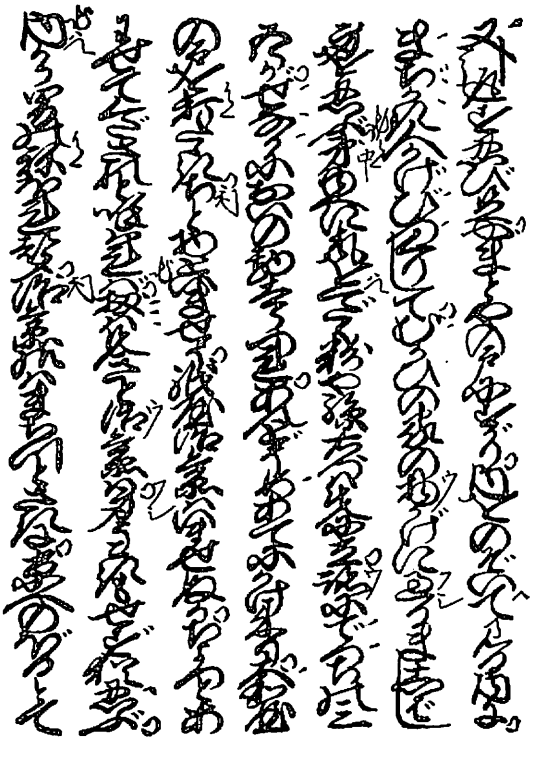
（33オ）

（33ウ）

しわすれたちやつと〳〵。(色)(詞)なんと伝兵衛。町人は爰が心やすい。侍なれば其まゝせつふくするであろの。我らあつかつて置てとん(切)(腹)(預)①としつ念。小刀もそらふたと。(失)(揃)(地色ハル)わたせば取てしつかと指。是さへあれば千人力。もふやすみやれと立帰る。追付おくだりなされま(休)(下)せ。よふござりまもそこ〳〵に跡はくろゝをこつとりと。(枢)②物音もなくしつまれり。(フシ)(静)

(地色ハル)治兵衛はつゝといぬるかほ。又引返す忍び足。(往)(顔)(33ウ)やまとやの戸にす(大和)(屋)がり。内をのぞいて見る内に。(間)(近)まぢかき人かげびつくりして。(影)むかひの家の物かげに過るましばし身を忍ぶ。(ウ)(フシ)(間)(向)

(地色中)弟ゆへに気をくだく粉や孫右衛門は先に立。(ハル)(屋)跡にでつちの三五郎が。(ウ)(丁稚)せなかにおいの勘太郎つれ。(背中)(負・甥)あんどうめあてにかけ来り。(行)(灯)(目当)大和屋の戸を打たゝき。(駆)(色)ちと物といませう。(詞)(問)紙屋治兵衛はいませぬ

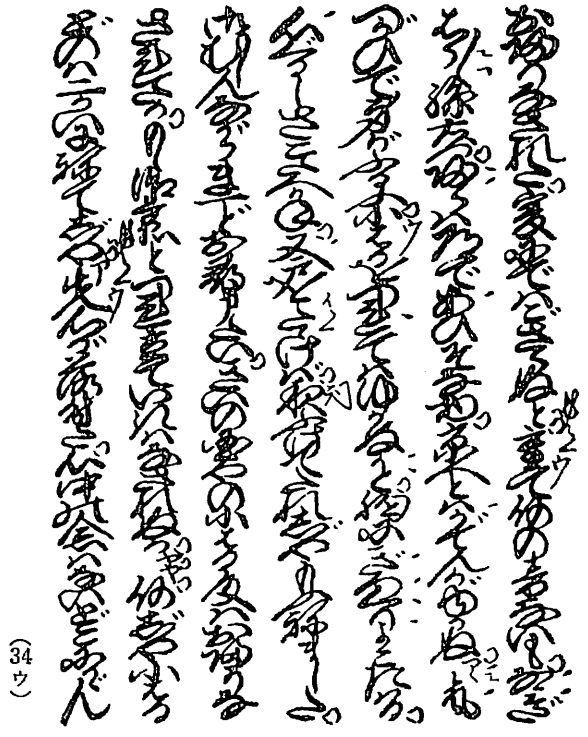


(34オ)

① 置て――「をいて」

② こつとり――「ごつとり」

か。ちよつとあわせてくだされと呼はれば。扨は兄きと治兵衛は。
会　地　貴　ウ
身うこきもせず猶忍ぶ。
フシ　動
内から男のねほれ声。治兵衛様はまちつとさきに。京へのぼると
地ハル　色　寝惚　詞　先
てお帰りなされた。爰にではごさらぬと。重て何の音ないも。
」(34オ)　地色ウ
なみだはら〳〵孫右衛門。帰らは道であひそな物。京へとはがて
無涙　会　合点
んがゆかぬ。ア、気づかひで身がふるふ。小はるをつれてはゆかぬ
ウ
かと。胸にぎつくりよこたはる。心ぐるしさこたへかね。又戸を
横　苦　堪
たゝけば。夜ふけてたれじやもふねました。御むしんながらま一
色　詞　誰　寝　無心
どお尋申たい。きいの国やの小はる殿はお帰りなされたか。もし
度　紀伊　屋
治兵衛とつれ立ていきはなされぬか。ヤ。ヤ。何じや小はるどの
連　殿
は二かいにねてじや。ア先心が落付た。心中の念はないどこにか
階　寝　地色ウ　屈
ゞんで此くをかける。一門一家親兄弟が。かたづをのんでざうふ
」(34ウ)苦　ハル　固　唾　臓　腑　ウ



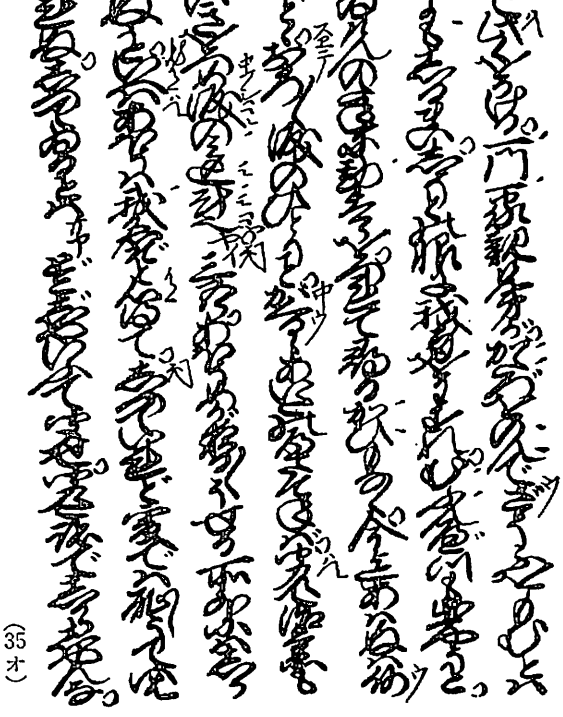
(34ウ)

をもむとはよもしるまい。しうとの恨に我身をわすれ。むふんべ（揉）（知）（舅）（無分別）つも出やうかと。ゐけんのたねに勘太郎を。つれて尋るかひもなく。今迄あはぬは何ごと〻。おろ〳〵涙のひとりこと。（意見）（種）（会）（事）（スエテ）（独）（言）

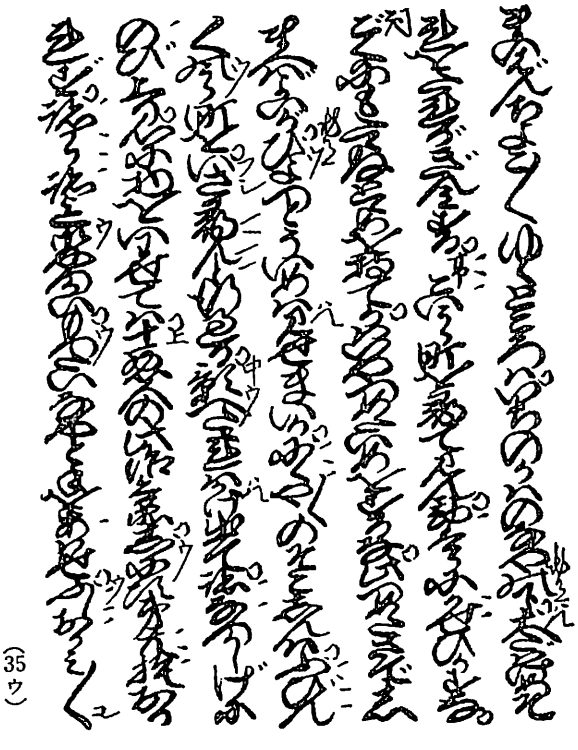
かくる〻あいたのへたてねば。聞えて治兵衛もいきをつめ涙のみ込計也。（中ウ）（隠）（間）（隔）（ハル）（息）（中フシ）（飲）

詞ヤイ三五郎。あほうめが夜る〳〵うせる所外にはしらぬかと。（知）

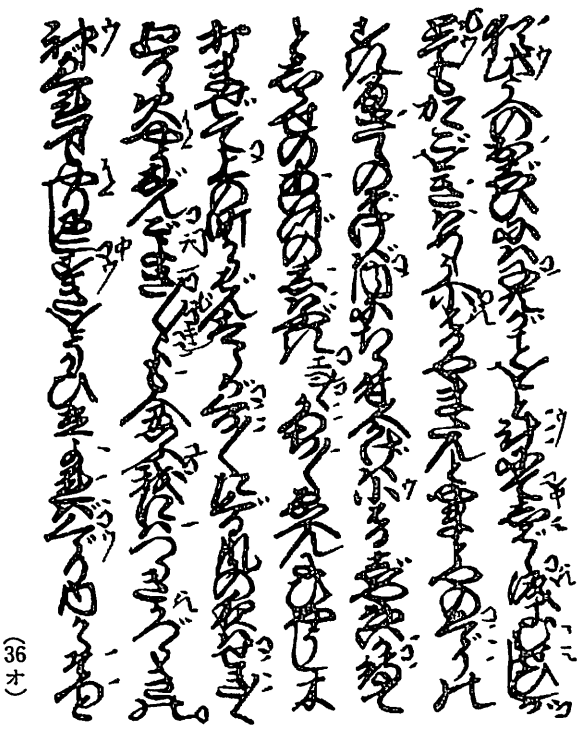
地色いへはあほうは我名ぞと心得て。詞しつていれど爰では恥しうていはれぬ。しつてゐるとはサアどこじやいふて聞せ。聞た跡でしからしやんな。まいばんちよこ〳〵ゆくところは。いちのかはのやの下。大だはけめそれをたれがぎんみする。サアこいうら町を尋てみん。勘太郎にかせひかすな。ごくにもたゝぬとゝめを持て。かはいやつめたいめをするな。此つめたさでしまへばよいが。（ハル）（言）（色）（詞）（知）（言）（叱）（35オ）（毎晩）（市）（側）（納）（地色ハル）（屋）（吟味）（裏）（風邪）（詞）（父）（冷）（目）（冷）



地色ウ
ひよつとういめは見せまいか。にくや〳〵のそこしんは。ふびん
変目　憎　底心
〳〵のうら町を。いさ尋んと行過る。
裏
中ウ
影へたゝれはかけ出て。跡なつかしげにのび上り。心に物をいわ
隔　駆　伸
せては。十悪人の此治兵衛。しに次第共捨おかれず。跡から跡迄
上　死
御やつかい。もつたいなやと手をあはせ。ふしおかみ〳〵猶此う
伏拝　(35ウ)上
へのおじひには。子共がことをと計にてしばし。涙にむせひしが。
慈悲
地ウ
とてもかくごをきはめしうへ。小はるやまたんとやまとやの。く
覚悟　待　大和屋　潜
ゞりのすき間さしのぞけば。内にちら付人かげは小はるじやない
隙　影
か。待てとしらせのあいづのしはぶき。エヘン。〳〵かつち〳〵
知　合図　咳
へんにひやうし木打まぜて。上の町からばん太郎が。くる〳〵た
拍子　番　来
ぐる風の夜は。せき〳〵廻る火やうじん。ごよさ。〳〵。〳〵も
風邪・咳・急　用心　詞　地キン
人忍ふ。我にはつらきかづらきの。神がくれしてやり過し。すき
葛城　隠　色　中ウ　隙

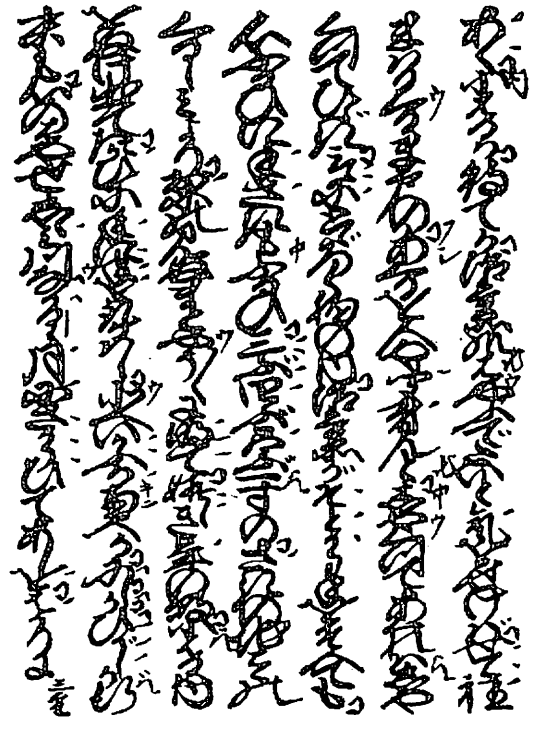


(35ウ)



(36オ)

をうかゝひ立よれば。くゞり内からそつとあく。小はるか。待て
か。治兵衛様はやふでたいと気をせけば。せく程まはるくるま戸
の。あくるを人や聞付んと。
しやくつてあくれはしやくつてひゞき。みゝにとゞろく胸の内。
治兵衛がそとから手をそへても。心ふるひに手さきもふるひ。三
ぶ四ぶ五ぶ一寸の。さきの地こくのくるしみより。おにの見ぬま
とやう〳〵に明て。嬉しき年の朝。小はるは内をぬけ出て。たか
ひに手に手を取かはし。北へいかふか南へか。に。し。かひがし
か行末も。心のはやせしゝみ川なかるゝ月にさからひてあしを。
はかりに



① 待て——「まつ」
② ごよさ——「ごよざ」
③ に。し。かひがしか——「に。し。か。ひがしか」

名こりの橋づくし

はしりかき。うたひの本はこのへりう。やらうぼうしはわかむら
走書　謡　中　近衛　流　野郎　帽子　若紫

さき。あくしよぐるひの。身のはては。かく成行と。定まりし。し
悪所狂　中　果　釈　中

やかのおしへも有ことか見たしうき身のいんぐはきやう。あすは
迦教　変　因果経　明日

世上のことくさに。かみや次兵衛が心中と。あだ名ちり行さくら
言種　紙屋　桜

木に。ねほり葉ほりを忝ざうしの。はんするかみの其中に有共し
根掘葉掘　絵草子　長地版摺紙

らぬ死かみに。さそはれ行もしやうばいに。うときむくひとくは
神　商売　報　観

ん念も。とすれは心ひかされてあゆみ。なやむぞ道理成。比はへ
小ヲクリ　フシヲクリ

」(37オ)

十月。十五夜の月にも見へぬ。身のうへは。心のやみの印かや。
中　上　闇

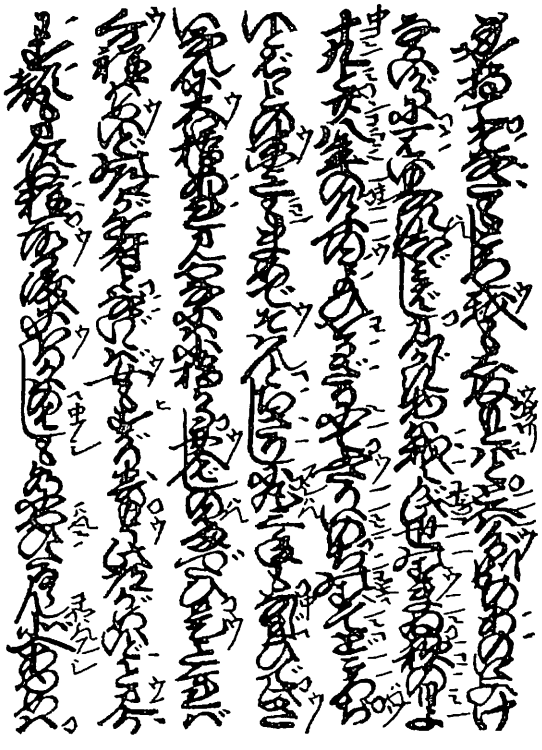
今おくしもはあすきゆるはかなきたとへのそれよりも先へきへ行
霜　明日　消　暗　消

ねやの内。いとしかはひとしめてねし。うつりがも何と。ながれ
閨　締　寝　移　香　冷泉成流

(37オ)

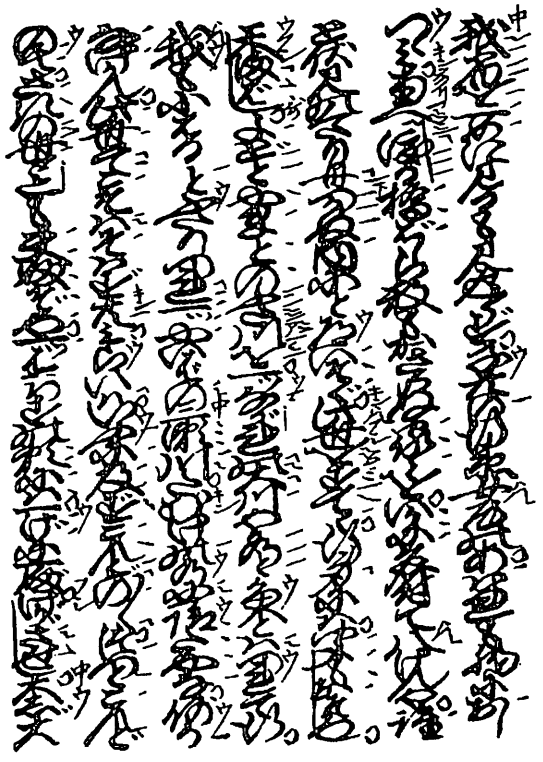
(37ウ)

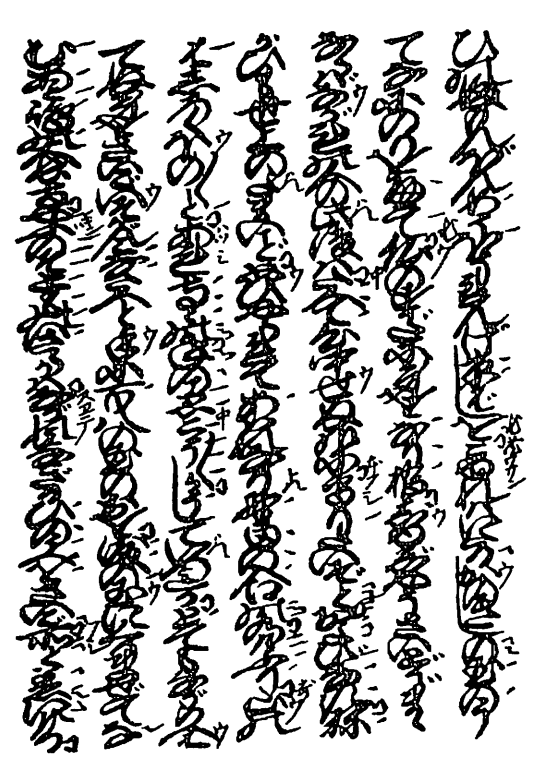
の。しゝみ川。西に見て。朝夕渡る。此橋の天神橋は其むかし。
鯉　中　昔
かんせうじやうと申せし時つくしへながされ給ひしに。君をした
菅丞相　筑紫　中
ひてださいふへたつた一とび梅田ばし。跡おひ松のみとりばし。
太宰府　飛　橋　追　緑　橋
わかれをなげき。かなしみて跡にこがるゝ。桜ばし。今に咄を聞
別　橋　中
渡る。一首の歌の御ゐとく。かゝるたつときあら神の。氏子と生
威徳　尊　荒
れし身を持て。そなたもころし我もしぬ。もとはと。とへは分別
殺　死　問
」(37ウ)
のあのいたいけなかいがらに。一はいもなきしゞみばし。みじか
貝殻　杯　鯉　橋
き物は我々が。此世のすまゐ。秋の日よ十九と。廿八年の。けふ
歌　住　中　今日
のこよひをかぎりにて。ふたりいの。ちのすてどころ。ぢいとばゝ
今宵　二人　命　爺　婆
との末迄もまめでそはんとちきりしに。丸三年も。なじまひで。
添　契　中
此さいなんに大江橋あれ見やなには小橋から。舟入ばしのはまづ
災難遭　難波　橋　浜
たひ。是迄くればくる程はめいどの道が近付と。なげゝば女もす
来　冥途　上



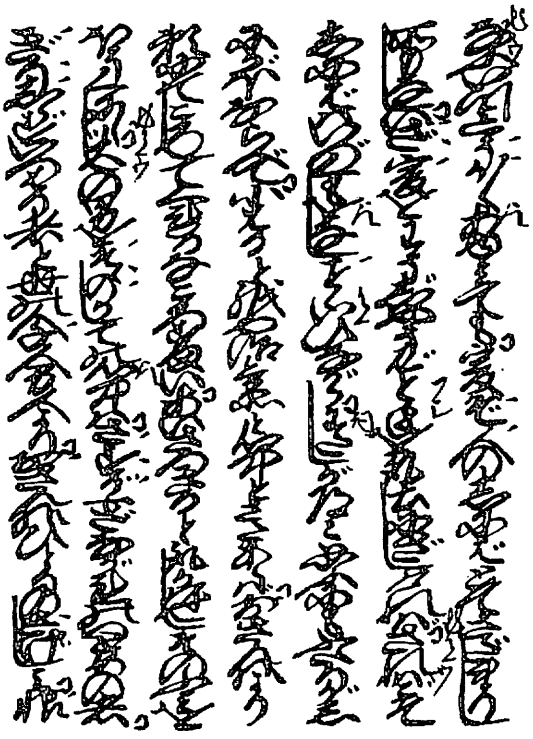
(38オ)

がり寄。もう此道がめいどかと見かわす顔も見えぬ程。落る涙に
ほりかはのはしも水にやひたるらん。北へあゆめは。我宿を一め
に見るも見返らず。子共の行衛女房の。あはれも胸におしつゝみ。
南へへ渡る橋ばしら数もかきらぬ家々を。いかに名付て八けんや。
誰と伏見のくたり舟つかぬ内にと道いそぐ。此世をすてゝ。行身
には。聞もおそろし。天満ばし。よどとやまとのふたァ川を。一
ッながれの大川や水と魚とはつれて行。我も小はるとふたりつれ
一ッやいばの三瀬川。たむけの水に請たやな。何かなけかん。此
世てこそはそはず共。みらいは。いふに及ずこんどの〳〵。つつ
とこんどの其。さきの世迄も夫婦ぞや。一ッはちすの頼には。一
げに一ぶ。げがさせし。大じ大ひのふもんぼんめうほうれんげ京
ばしを。こゆれはいたるかのきしの玉のうてなにのりをへて。仏





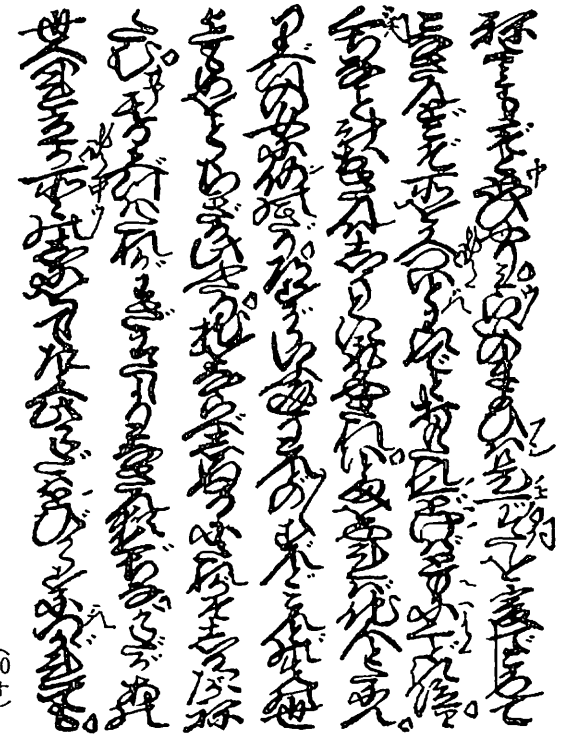
のすがたに身をなり橋。しゆじやうさいどがまゝならばながれの
姿　御為・成　衆生　済度　流
人の此後は。たへて心中せぬ様に。守りたいぞと。およびなき。
絶　中　本フシ
ねがひも世上のよまいごと。思ひやられてあはれなり野田の入江
願　世迷言　哀
の。水けふり。山のはしろくほの〳〵と。あれ寺々の。かねのこ
煙　歌ウ　端白　鐘　声
ゑこう〳〵。かうしていつ迄か。とてもながらへはてぬ身をさい
錏　中　長　最
ごいそがんこなたへと手に百八の玉のおを。涙の玉にくりまぜて
期　緒
なむあみ島の大長寺。やぶのそとものいさらかは。ながれみなぎ
南無阿弥・網　薮　外面　川　流
るひのうへをさいご。所と着にける。」(39オ)
樋　上　最　期
なふいつ迄うか〳〵あゆみても。爰ぞ人のしにばとてさだまりし
地　死場　定
所もなし。いざ爰をわうじやうばと手を取土にざしければ。
往生場　座
されば地色こそしやばはいづくもを同なしことゝいひながら。わたしが
婆　婆　詞
道々思ふにもふたりがしにがほならべて。小はると紙や治兵衛と
二人　死顔　屋



(39ウ)

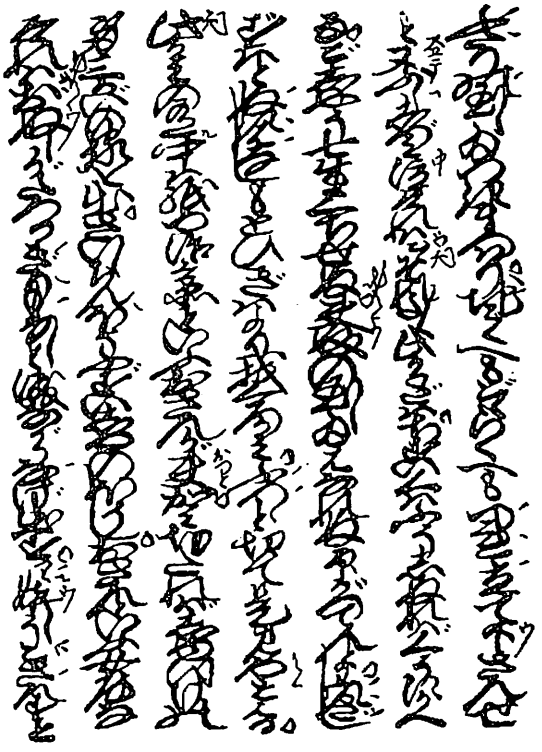
① げがさ――「げがき」

心中とさたあらば。おさん様より頼にてころしてくれるなころす
沙汰　三　殺　殺
まい。あいさつきると取かはせしそのふみをほうくにし。大じの
挨拶　切　交　文　反　古　地色ウ　事
男をそゝのかしての心中は。さすが一ざながれのつとめの者。ぎ
座流　勤　義
りしらずいつはり者と世の人千人万人より。おさん様ひとりのさ
理　偽　三　一人　蔑
げしみ。恨ねたみもさぞと思ひやり。みらいのまよひは是一ッ。
(39ウ)妬　中　未来　迷　ウ　フシ
わたしを爰でころしてこなさんどこぞ所をかへ。ついとわきでと
詞　殺　地色ハル　脇
打もたれくどけばともにくどき泣。ア、ぐちなこと計おさんはし
口説　共　色　愚痴　詞　三　舅
うとに取かやされ。いとまをやれば他人とたにん。りべつの女に
返　暇　他人　離別
何ンのぎり。道すがらいふ通りこんどの〳〵ずんどこんどの先の
義理　言　今度　今度
世迄もめをとゝちぎる此ふたり。枕をならべしぬるにたれがそし
女夫　二人　死　誰
るたがねたむ。サア其りべつはたれがわざわたしよりこなさん猶
誰　離別　業
ぐちな。からだがあの世へつれ立か。所々のしにをしてたとへ此
愚痴　体　連　地色中ウ　死



(40オ)

からだはとびからすにつゞかれても。ふたりの玉しゐつきまつは
体 烏 ① (40オ) 二人 魂
り。地ごくへもごくらくへもつれ立て下さんせと又ふししづみ泣
獄 極 楽 連 中
ければ。
詞
ヲ、それよ〳〵此からだは。ちすいくはふうしぬればくうにかへ
体 地 水 火 風 死 空
る。ごしやう七生くちせぬ。夫婦の玉しゐはなれぬ印がつてんと。
五 生 朽 地色ウ 魂 離 合 点
わきざしずはとぬきはなしもとひぎはより我くろかみ。ふつゝと
脇 差 元 結 際 黒 髪
切て是見やこはる。此かみの有ル中は紙や治兵衛といふおさんが
小 色 詞 髪 屋 三
夫。かみ切たればしゆつけの身三がいの家を出。さいしちんぼう
髪 出 家 界 妻 子 珍 宝
ふずいしやのほうし。おさんといふ女房なければ。おぬしがたつ
不 随 者 法 師 三 地色ウ
るぎりもなしと涙ながらなげ出す。ア、嬉しうございすと小はる
義 理 投 ウ
」(40ウ)
もわきさし取上あらひつすいつなで付し。むごやおしげもなげし
脇 差 洗 梳 撫 惜 無・投 島
まだはらりと切てなげ捨る。かれのゝすゝき夜はのしも共にみだ
田 投 枯 野 薄 半 霜 中フシ



(40ウ)

① つゞかれても――「つゝかれても」

るゝあはれさよ。

うき世をのがれし。あまほうし。夫婦のぎりとはぞくのむかし。

とてものことにさつはりとしにばもかへて山と川。此ひの上を山

になぞらへそなたがさいごば我は又。此ながれにてくびくゝりさ

いごはおなし時ながら。しやしんの品も所もかへておさんに立ぬ

く心の道。そのかゝへ帯こなたへとわかむらさきの色もかも。む

じやうのかぜにちりめんの此世あの世のふたへ廻り。ひのまない

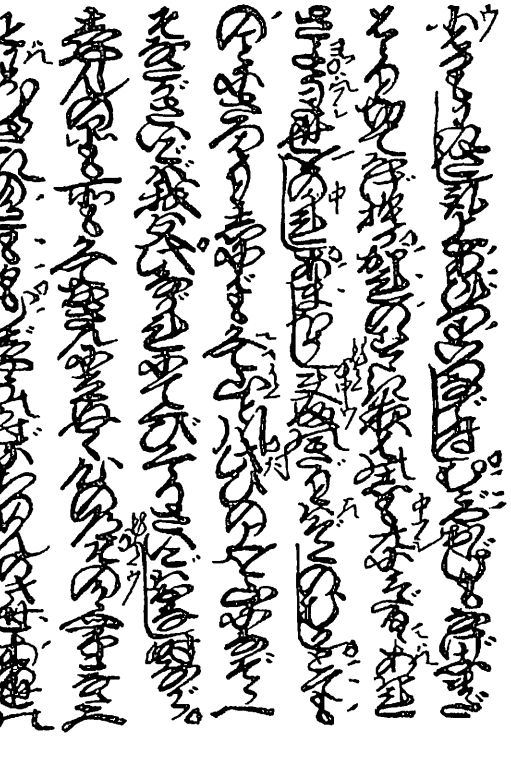
た木にしつかとくゝりさきをむすんでかりばのきじの。妻ゆへ我

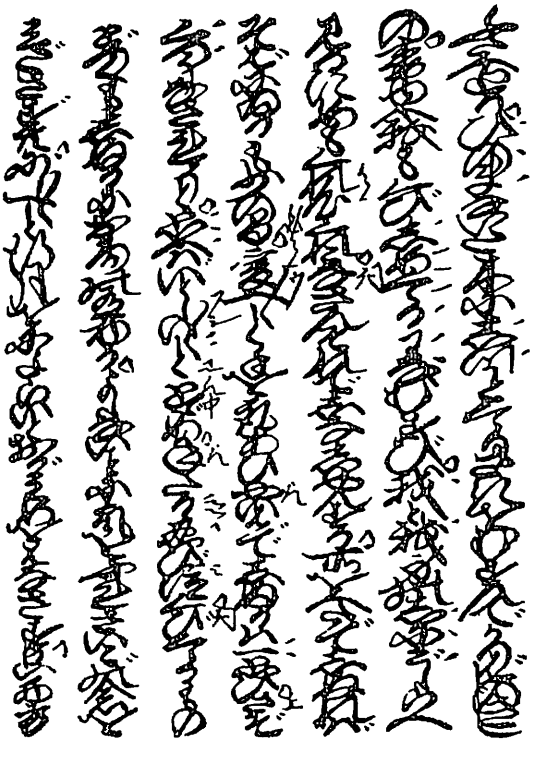
もくびしめくゝるわなむすび。我と我身のしにごしらへ見るにめ

もくれ心くれ。こなさんそれでしなしやんすか。所をへだてしぬ

ればそばにゐるも少の間。爰へ〳〵と手を取あひやいばでしぬる

は一思ひ。さぞくつうなされうと。思へばいとしい〳〵ととゞめ。





かねたる忍び泣。

詞 くびくゝるものどつくもしぬるにおろかの有物か。よしないこと
首 喉 死

に気をふれさいごの念をみださず共。にしへ〳〵と行月をによら
触 最 期 西 如 来

いとおがみめをはなさす。只西方をわすりやるな。①心のこるのこ
目 残

とあらばいふてしにや。何にもない〳〵。こなさん定ておふたり
言 死 二人

の子たちのことか気にかゝろ。アレひよんなこといひ出して又な
言 泣

かしやる。てゝ親が今しぬる共何心なくすや〳〵と。かはいやね
父 死 寝

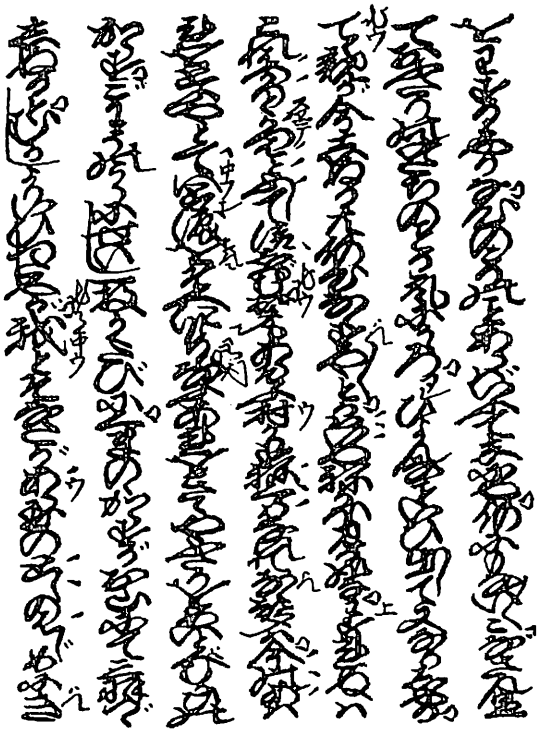
かほ見る様な。わすれぬはこれはつかりとかつはとふして泣しづ
顔 忘 上 伏

む。

地 声もあらそふ村からすねくらはなれてなく声は。今のあはれを
群 烏 塒 離 鳴 問

ふやとていとゝ涙をそへにける。
中フシ

詞 なふあれをきゝやふたりをめいどへむかひのからす。ごわうのう
聞 二人 冥 途 烏 牛 王 裏



(42オ)

① 心のこるの――「こゝろのこりの」

るゝあはれさよ。

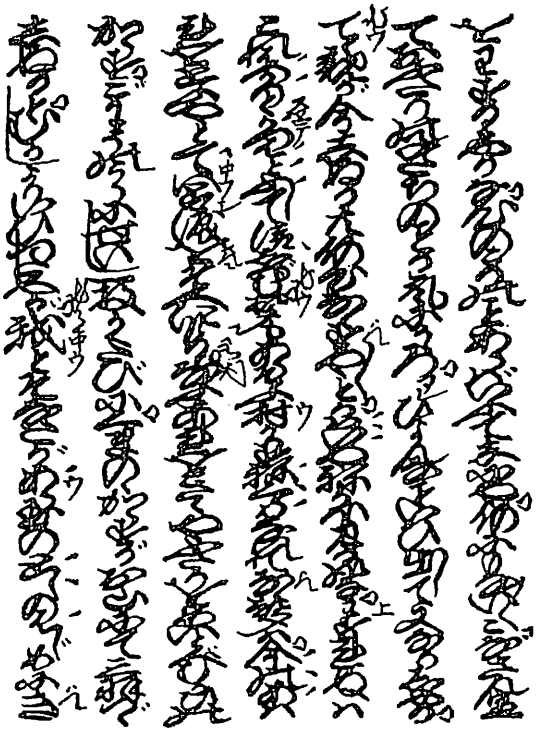
うき世をのがれし。あまほうし。夫婦のぎりとはぞくのむかし。
とてものことにさつはりとしにばもかへて山と川。此ひの上を山
になぞらへそなたがさいごば我は又。此ながれにてくびくゝりさ
いごはおなし時ながら。しやしんの品も所もかへておさんに立ぬ
く心の道。そのかゝへ帯こなたへとわかむらさきの色もかも。む
じやうのかぜにちりめんの此世あの世のふたへ廻り。ひのまない
た木にしつかとくゝりさきをむすんでかりばのきじの。妻ゆへ我
もくびしめくゝるわなむすび。我と我身のしにごしらへ見るにめ
もくれ心くれ。こなさんそれでしなしやんすか。所をへだてしぬ
ればそばにゐるも少の間。爰へ〳〵と手を取あひやいばでしぬる
は一思ひ。さぞくつうなされうと。思へばいとしい〳〵ととゞめ。

かねたる忍び泣。

詞 くびくゝるものどつくもしぬるにおろかの有物か。よしないこと
首 喉 死
に気をふれさいごの念をみださず共。にしへ〳〵と行月をによら
触 最 期 西 如 来
いとおがみめをはなさす。只西方をわすりやるな。心のこるのこ
目 ①残
とあらばいふてしにや。何にもない〳〵。こなさん定ておふたり
言 死 二人
の子たちのことか気にかゝろ。アレひよんなこといひ出して又な
言 泣
かしやる。て〵親が今しぬる共何心なくすや〳〵と。かはいやね
父 死 寝
かほ見る様な。わすれぬはこれはつかりとかつはとふして泣しづ
顔 忘 伏
む。

地 声もあらそふ村からすねくらはなれてなく声は。今のあはれをと
群 烏 塒 離 鳴 問
ふやとていと〵涙をそへにける。
中フシ

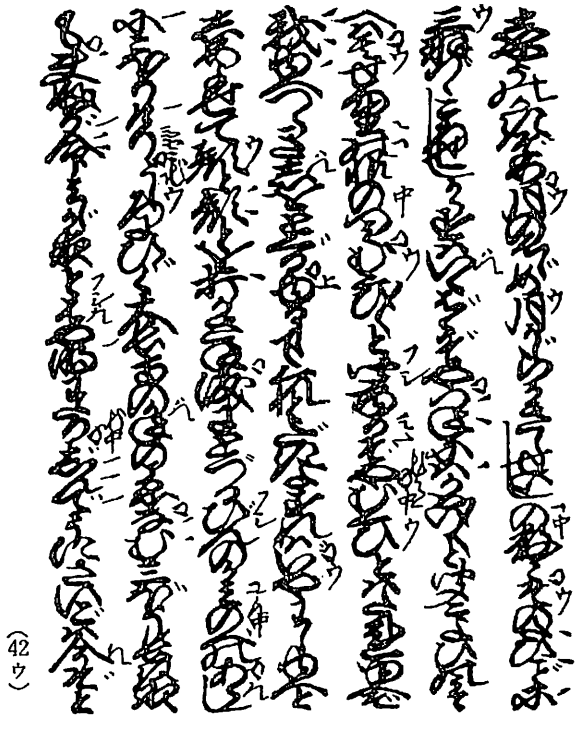
詞 なふあれをきゝやふたりをめいどへむかひのからす。ごわうのう
聞 二人 冥 途 烏 牛王 裏



(42オ)

① 心のこるの――「こゝろのこりの」

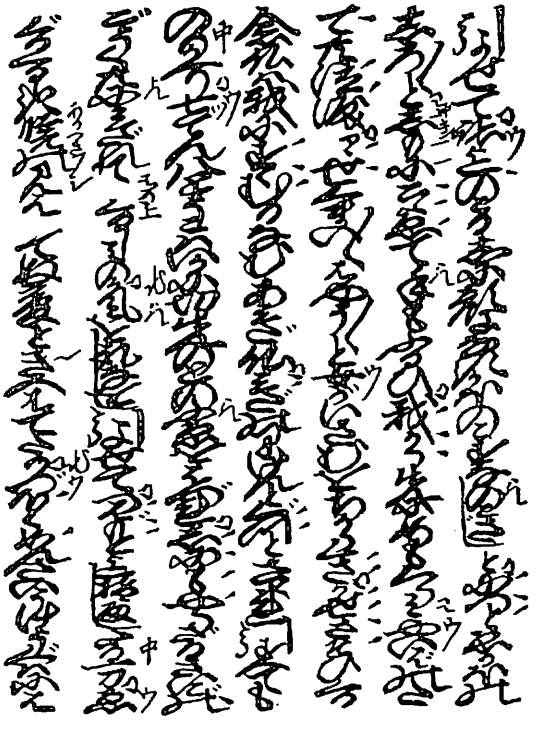
らにせいし一枚かくたびに。くまの〻からすがお山にて三羽づゝ
誓紙　熊野烏
しぬると。むかしよりいひつたへしが。我とそなたがあら玉のと
死　昔　地色中ウ　新　年
しのはじめにきしやうのかきぞめ。月のはじめ月がしらかきしせ
起」(42オ)請書初　頭　誓
いしの数々。そのたひごとに三羽づゝころせしからすはいくばく
紙　中　殺　烏
ぞや。つねにはかはい〳〵と聞こよひのみゝへは。其せつ生の恨
常　今宵　耳　殺
のつみ。むくひ〳〵と聞ゆるぞや。むくひとはたれゆへぞ我ゆへ
罪　中　報　地色中ウ　報
つらきしをとぐる。ゆるしてくれとだきよすれば。いやわしゆへ
死　上　抱寄
としめよせて顔と顔とを打かさね。涙にとづるびんのかみのべの。
締寄　閉　鬢髪　野辺　ノル中
あらしにこほりけり。
嵐　凍
うしろにひゞく大長寺のかねのこゑ。なむ三ぼう長き夜も。夫婦
地ウ　後　鐘　声　南無宝
が命みじか夜とはや明わたる。じんでうにさいごは今ぞと引よせ
短　地中　晨朝　最期　」(42ウ)
て。跡迄のこるしに顔になきかほのこすなのこさじと。につとゑ
残　死　泣　顔　残　ハル　笑



(42ウ)

かほのしろ〳〵としもにこゝゑて手もふるひ。我から先にめもく
顔白霜凍中目
らみやいばのたて共泣涙。ア、せくまい〳〵はやう〳〵と女がい
刃①立所無早
さむをちからくさ。かせさそひくる念仏は我にすゝむるなむあみ
カ草風南無阿弥
だ仏。みだのりけんとぐつとさゝれ引すへてものりかへり。七ツ
陀弥陀利剣刺据伸返中
てん八とうこはいかに切先のとのふゑをはづれ。しにもやらざる
転倒喉笛死
さいごのごうく共にみだれて。くるしみの。
最期業苦②上
気を取なをし引よせて。つばもと迄指通したる一刀。ゑぐるくる
直鍔元中苦
しき暁の見はてぬ夢ときへはてたり。
消

づほくめんさいうけうぐはにはおり打させしがいをつくろひ。泣
頭北面西右脇臥(43オ)羽織③着死骸
てつきせぬなこりのたもと見すてゝかゝへをたぐりよせ。くびに
名残袂抱首
わなを引かくる寺の念仏も切ゑかう。うえんむゑんないしほうか
罠回向中有縁無縁乃至法界
い。平等の声をかぎりにひのうへより。一れんたく生なむあみた
樋上蓮托南無阿弥陀



(43オ)

① たて共――「たてども」
② 共に――「共に」
③ 打させ――「打させ」

仏とふみはつし暫くるしむ。
踏外

なりひさごかぜにゆらるゝことくにて。しだいにたゆるこきうの
生瓢風　次第　呼吸

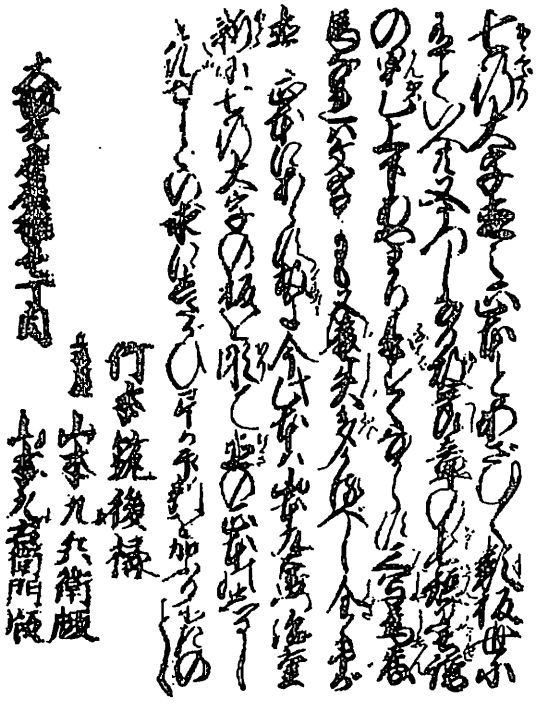
道いきせきとむるひの口に。此世の縁はきれはてたり。朝出のぎ
息塞・堰　梱　切果　色　地ウ　漁

よふがあみのめに見付て死たヤレしんだ。出あへ〳〵と声々にい
夫網目①　死　言

ひ広たる物語。すくにじやうふつとくたつのちかひのあみ島心中
成仏得脱誓網

とめことに。なみたをかけにける」(43ウ)
目毎涙②

七行大字直之正本とあざむく類板世に
有といへ共又うつしなる故節章の長短墨譜
の甲乙上下あやまり甚すくなからす三写烏焉
馬なれは文字にも又違失多かるべし全く予が
直之正本にあらす故に今此本は山本九右衛門治重
新に七行大字の板を彫て直之正本のしるし
を紀せよとの求にしたがひ予か印判を加ふる所左のことし



竹本筑後掾 竹本 博教
正本屋山本九兵衛版
大坂高麗橋壱丁目 山本九右衛門版 治重

① 死た――「しんだ」
② かけにける――「かけにけり」